

自殺多発場所での活動者サミット 自殺のない社会を目指してー

記 録

目次

自殺多発場所での活動者サミットの概要	1
オープニング・メッセージ（ネットワーク設立準備会代表茂幸雄）	2
事務局長からの経過報告（事務局長福山なおみ）	3
話し合い1：自殺多発場所からの問題提起	5
話し合い2：会場からの発言	27
これからの取り組みとネットワーク構想について（事務局長福山なおみ）	42
クロージングメッセージ（ネットワーク設立準備会代表茂幸雄）	44

資料：案内チラシ

2010年2月1日

自殺のない社会づくりネットワーク・ささえあい事務局
事務局長 福山なおみ

東京都文京区湯島3-20-9-603（〒113-0034）
（株）コンセプトワークショップ内
電話 03-6803-2575

sasaeai@gmail.com

<http://sasaeai.org/>

自殺多発場所での活動者サミットの概要

<日時>

2009年10月24日 午後1時～5時

<場所>

日本財団大会議室

<プログラム>

総合司会：太長根理會子

オープニング挨拶：代表茂幸雄

自殺のない社会づくりネットワーク準備会の活動報告：事務局長福山なおみ

話し合い1：現場活動者の語り合い

<パネリスト>

茂 幸雄（NPO法人心に響く文集・編集局理事長）

藤藪庸一（NPO法人白浜レスキューネットワーク理事長）

日原和美（富士河口湖町役場福祉推進課課長）

藤田真宏（Man to Man G.com（株）営業企画次長）

佐藤洋司（ホテル経営）

<進行役>

佐藤 修（コミュニティケア活動支援センター事務局長）

話し合い2：参加者の語り合い

参加者の自由な話し合い

ネットワーク構想発表：事務局長福山なおみ

クロージングメッセージ：代表茂幸雄

<主催>

自殺のない社会づくりネットワーク設立準備サミット実行委会

<後援>

NPO法人心に響く文集・編集局

NPO法人白浜レスキューネットワーク

NPO法人自殺防止ネットワーク風

コミュニティケア活動支援センター

NPO法人全国自死遺族総合支援センター

NPO法人自殺対策支援センター・ライフリンク

一般社団法人日本いのちの電話連盟

内閣府

<協賛>

ゴールドマン・サックス証券株式会社

オープニング・メッセージ（ネットワーク設立準備会代表茂幸雄）

福井県の東尋坊で自殺の水際活動をしている茂と申します。

本日は、自殺のない社会づくりネットワークを目指して、「自殺多発場所での活動者サミット」を呼びかけましたところ、全国からこのように多くの方のご参加をいただきまして、ありがとうございます。

また、この開催に際しまして、ゴールドマン・サックス証券の協賛をはじめ、多くの団体によるご後援をいただき、また、多くの同志の方たちの手弁当によるご協力をいただきまして、このように盛大に開催されますこと、あつく御礼申し上げます。

私が東尋坊で活動を始めてから、あれよあれよという間に5年半も過ぎてしまいましたが、その間、今日までの間に215名の、東尋坊の岩場から今まさに日本海に向かって飛び込もうとした人たちと遭遇し、そして自殺を食い止め、そのあとの支援などをさせてもらってきました。

そういう活動をしていて、いつも心の中で、もやもやとしているものがあるんですね。それはなにか。これほど広い日本の中に、東尋坊という、自殺が多発する場所がある、にもかかわらずそこで十分な対策が講じられていない。これでいいんだろうか。

こういう活動をしていまして、これはもう非常に恥ずかしい。恥ずかしいといえますか悲しい。悲しい状況を肌で感じているのです。

私だけが特別のことをしているのではなく、自殺が多発しているということを知ったら、誰も知らんぷりして通り過ぎてゆくことはできないんじゃないかな、と思っております。人の命が大切にされる社会、これこそが、すばらしい社会だろう、と思います。

今日は長い時間となりますが、みなさんと命に関するいろんな問題点を共有できたらな、と思っております。時間の許される限り最後までのお付き合いのほどよろしく願いいたします。

なお、私たちのこの活動、「自殺のない社会づくりネットワーク・ささえあい」という名称についてですが、この活動に共感してくれたみんなで話し合っただけ決めたものです。絆とかつなぎあひとか、まあ、いろんな人たちをこうつないでいこうとか、いろんないい名前もありましたけども、いろいろな思いをおさえるのではなく、お互いに支えあって、自殺のない社会をつくろうという主旨から、「ささえあい」というこういう名前をつけさせていただきました。今後ともみなさんのご支援、ご鞭撻のほどよろしく願いいたします。

どうもありがとうございました。

事務局長からの経過報告（事務局長福山なおみ）
（報告に先立ち、この半年間の記録を映像で簡単に紹介）

事務局長の福山なおみと申します。

今日は大勢お越しくださしましてありがとうございます。

私は、臨床の看護の現場におりました時に、患者さんの自殺に遭遇しながら、何かもっとできないんだろうかということですとずっと悩んでまいりました。

それで、医療の現場だけではやっぱりだめだと思い、地域社会とどうつながっていったらいいのかということを考えて出していました。

看護教育の場に移りしばらくした時にライフリンクの活動がはじまり、そこに参加しながら、代表の清水康之さんたちとも一緒に考えてまいりました。

その後、法の整備（自殺対策基本法）はできました。しかし、11年連続、さらに12年目の今年もそうなりそうですが、毎年自殺者3万人をだすこの社会に対して、何とか具体的に、現場から活動していく必要があるのではないかと思い、この活動に取り組み出しました。

水際で命を救っても、そのあとの生きる支援というものがなければ、それは救ったことにはならない、というふうに思っていました。

ちょうどその頃、地域社会での人のつながりを重視しながら、支え合う関係を育てていく活動をされている、コミュニティケア活動支援センター（コムケアセンター）の佐藤修さんとも出会い、この会を発足させることにしました。そして、今年の4月25日、ネットワーク立ち上げのための緊急集会を開催し、設立準備会を立ち上げました。

私たちが考えたネットワークは、人のつながりと支え合いという考え方を基本的な理念において、3つのサブシステムを考えています。

1つは「ゲートキーパーネットワーク」です。これは、自殺防止活動に取り組む人たちのネットワークのことをさします。

2つ目はフォワードのネットワークです。自殺を考えたが思いとどまった人たちを私たちは、フォワードと呼ぶことにしました。体験を語りあいながらそれぞれがその人らしい人生を進んでいくためのネットワーク、それがフォワード・ネットワークです。

そして、3つ目がシェルターネットワークです。自殺を考えた人たち、つまりフォワードの人たちの生活の自立に向けた活動と一緒に取り組んでいく人たちのネットワークです。シェルターは暮らす場所、働く場所などの「居場所」として確保することが重要ですが、それだけではありません。前に進もうと思っている人が前進できるように人が「支え合う」ということが非常に大切です。

そうしたネットワーク構想に基づいて、この半年、さまざまな活動に取り組んできました。

ひとつはフォワードを中心にした交流会です。これは東尋坊の近くで開催しました。2つ目に自殺が多発しているといわれる現場視察とそこで活動している関係者との交流。3つ目に自殺防止活動などに関する自治体アンケート調査。4つ目にネットワーク設立準備会に参加したメンバーの交流会です。

まず、一つ目の東尋坊の集いですが、今年の7月の31日から8月1日にかけて東尋坊の近くで、総勢36名、そのうち体験者の方が16名、で、集いの会をもちました。ご承知のように当事者の人たちというのは、何らかのストレスにさらされた時にそのときのことを思いおこしてしま

ってつらくなるということがありますので、そういった意味で安全も考えまして、精神科医 1 人、看護師 3 名も参加しました。

ここでの目的は、フォワードのエンパワーの支援が一番でしたが、あわせて、フォワードによる体験交流プログラムのモデルが構築できないか、ということも目指しました。いろいろな知見を得ることができました。自殺体験者からの社会へのメッセージの発信にも取り組んでみました。いろいろな意見も出てきました。しかし一番大きな成果は、これまで語ったことのなかった人たちが自分の思いを率直に安心して語れる場がとても大切だということを改めて確認できたことです。

2 つ目は、現場視察と交流者との交流です。これまで訪問したのは、東尋坊、三段壁、足摺岬、天ヶ瀬ダム、青木ヶ原樹海、宮ヶ瀬ダム、錦ヶ浦の 7 か所です。

こうしたところでの関係者との交流で感じたことは、これまではいわゆる障壁ですね、フェンスとか照明とかもそうなんですけども、そういう施設設備的なものを使っての自殺防止対策をしてきたわけですが、それはとても大事なことで、これからも重要ですが、どうもそれだけでは十分ではないのではないかとということです。

そうした障壁のおかげで、一時踏みとどまっても、また同じ現場に立ってしまうということは何ぞなんだろうかとということを考えた時に、その場を自殺の誘発場所ということではなく、むしろ生きていく大きな力を得られるような場所に変えていかなければいけないのではないかと。実際に、後で話が出てきますが、青木ヶ原ではそういう取り組みが始まっています。そういうポジティブな形での活動が大切ではないかと思います。

また、私たちの現場訪問が契機になって、現場関係者のつながりがふと増えてきたということも、一つの成果だったように思います。

自治体アンケートに関しましても、47 都道府県 18 政令都市を対象に行いました(回収率:72%)。ただ今回の調査では、多発地帯といわれるところでの民間団体の活動については新しい情報は得られませんでした。行政からは、障壁などの施設設備対策にあわせて、人とのつながりや職種を超えた連携とか、そうするためにどういった啓発活動をしていったらいいんだろうかというような意見が多く寄せられました。多発地点という認識に関しては、「ある」というところが 10%、「答えられない」が 42%、「なし」が 48%です。これに関しましてはまた細かい分析をしていく予定です。

それから、毎月、交流会をもっています。組織とか立場を超えて、誰でもが問題を提言できる場です。話をしていくプロセスの中で、人がつながったり支え合ったりすることができます。これからもこういった交流会は継続していこうと思っております。

今回のサミットは、こうした半年間の活動から見えてきたことをふまえて、自殺対策に取り組んでいる現場からの率直な提言を出しあって、問題解決に向けてのネットワーク構想の実現に向けて、進めていきたいと思っております。

話し合い1：自殺多発場所からの問題提起

太長根理会子（総合司会）

それではこれから前半の話し合いのセッションにはいります。今日はゲートキーパー活動、それからシェルター活動に取り組まれている3人の方をパネリストにお迎えしました。進行は実行委員の一人である佐藤さんをお願いいたします。

佐藤修（進行役）

それでは話し合いのセッションにはいりたいと思います。

前半の話し合いは、実際に現場で活動されている3人の方を中心に進めさせていただきます。ただ今回は、それぞれの活動をお話いただくのではなく、活動を通していろいろと感じていることや社会に伝えたいこととお話し合いいただきたいと思います。またテーマによっては会場のみなさんにも発言するような形で進めさせていただきます。

会場のみなさんも、自殺というと何か特別なものという感じで聞くのではなく、自分の生き方と重ねあわせながらお聞きいただければと思います。報道関係の方も多数いらっしゃいますが、単に観察的に報道するというのではなく、ぜひ、参加者の一人よして自分の生き方につなげながら取材していただければと思います。なお、後半の話し合いでは、会場のみなさんにお話しただこうと思っています。

では早速話に入りたいと思いますが、まずパネリストの3人をご紹介します。

まずこの会の代表である茂幸雄さんです。茂さんはNPO法人ころろに響く文集・編集局の代表として、東尋坊で5年以上に自殺防止の活動に取り組まれています。

次にNPO法人白浜レスキューネットワーク理事長の藤藪庸一さん。和歌山県白浜の三段壁で活動されています。

このおふたりの活動は最近テレビでよく紹介されていますのでご存知の方も多いのではないかと思います。

もうお一人、青木ヶ原樹海をかかえている富士河口湖町の町役場の日原和美さんにもいらっしゃっていただきました。日原さんは行政の方ですが、住民と一緒に活動されています。

それぞれ少しずつ取り組み方は違いますが、どんな活動をされていて、どんな問題を感じられているのか、についてそれぞれお話しをしていただこうと思います。

まず茂さんからお願いしたいですが、なぜ東尋坊でこういう活動を始めたのか、また活動しているいろいろ考え、感じるものがあつたと思いますが、そのあたりをお話しいただけますか。

茂幸雄（NPO法人ころろに響く文集・編集局理事長）

私は、福井県の東尋坊の水際で自殺防止の活動をしています。東尋坊というと、みなさん「自殺の名所」などと思われていますが、地元の人たちは「名所じゃない、そんなこと言うな」と怒ります。

私は元警察官なんですね。東尋坊を管轄する警察署に1年間勤務していました。福井県に住んでいる人は皆、東尋坊が自殺の名所であるということは知っているんですね。しかし、どれだけの人が亡くなっているかについては報道がされていない。それをいいことに何にも対策が講じられていなかったのです。

それじゃどれだけの人が亡くなっているのかについて地元の警察の資料を調べてみましたところ、過去30年間に646名、この10年間だけでも244名の方が亡くなっている。しかも、東尋

坊の周囲約 1.4km あるうちの 3 箇所で大半の方が亡くなっている、ということがわかりました。これを許しておいていいのか、このまま放っておいていいのか、というのが私の最初の疑問でした。

10 年間で約 244 名ということは、200 人以上乗りのジャンボジェット機があそこの岩場に 10 年で一機づつ落ちていることになるんですね。30 年間に 3 機のジャンボジェット機が墜落していることになる、にも関わらず知らん顔、といいますか、何も対策が講じられていない。しかも亡くなっている人はどんな人かといいますと、30 代前半の男性、また 50 代すぎの男性です。30 代前半といえばこれからの働きざかりの人なんですね、家庭を支える立場にある。また、50 代以降の人というと家庭の大黒柱ですよ、その人が亡くなると家庭がこわれてしまいますね。これは放っておくわけにはいかん。ということで当時私としては、地元、東尋坊の近くに警察の官舎がありまして、そこで単身赴任をしていましたので、時間の許す限り朝晩巡回しておりました。

そこで、東京からみえた老カップルが、今まさに東尋坊の岩場から飛び降りようとしていた寸前に遭遇したのです、呼び止めて、そしてもういっぺんがんばろうよと言って、地元の福祉課に引継いだのです。ところが、そこでは 500 円とか 320 円とか、隣の町まで行く交通費を渡されて追い散らされるだけだったのです。

その人たちは、その後、7 か所の役所をまわり、命乞いをして歩いたのですけども、どこも助けてくれるところがなかった。そして結局、自殺してしまいました。その方たちから私に遺書が送られてきたため、そのことがわかったのです。遺書には、「今後私達のような者が現れても、なんとか東尋坊でこういうことがないようにしてください」と書いてありました。2 人にとっては、この世の中に再出発を支援してくれる役所がひとつもなかった、と言っていたことに私は強く疑問を感じてしまったのです。この 2 人の死を無駄にはできない、ということでこの活動をはじめさせていただきました。

最後の砦となるべきところはどこ？ どこへ行ったらいいの？ ということをおみんなで考えて、住みやすい世の中にしていきたいな、ということで、こういった活動をはじめて、5 年半になったということでございます。

佐藤修

ありがとうございました。せっかく茂さんが思いとどまらせても、その後がきちんとしていないと問題は解決しない。そこでいろいろな活動を広げられてきた、ということですね。その活動の中で、行政や地域との関係もいろいろ変化してきていますか。

茂幸雄

そうですね。活動を始めた頃は、東尋坊のイメージが悪くなるからやめてくれと、ということで、非常に抵抗がありました、ところが最近、ようやく理解を得ることになりまして、当時は月 1 回のパトロールしかなかったんですが、いまは週 3 回パトロールしてくれることになりました。また、東尋坊には遊覧船がありますが、その遊覧船のガイドも以前はここから何人の人がとびこんだんですよ、などといって、自殺を誘発しかねないことを言っていました、最近はそれも言わなくなった。最近は地元も非常に真剣にとりくんでくれるようになっていきます。

佐藤修

藤藪さん、白浜の場合は行政も協力的で、一緒に取り組んでいる感じがしますが。

藤藪庸一（NPO法人白浜レスキューネットワーク理事長）

はい。私が活動しているのは、和歌山県白浜町にある三段壁です。そこで、1979年から僕の前牧師（白浜バプチスト白浜教会）が、自殺防止のために、「いのちの電話」という看板をたてて活動を始めたんです。三段壁は県立公園の中なので、風致地区として看板の規制もあるのですが、そこに看板をたてるということを町長をはじめ、みんなが理解してくださって、3つ看板をたてることができ、活動が始まりました。

そこから市役所の福祉課や地元の警察の方との関わりも生まれてきています。最近自殺の問題が大きく取りざたされるようになってきましたが、そうした長い付き合いの中で、行政もなんとかこの問題に関わらなければいけないということから、最近はさらにより関係へと進んでいます。

今年の2月から白浜町では、白浜町主催で見回りを始めるようになりました。水曜日と木曜日が統計的に自殺者が多かったということもあって、水曜日と木曜日の17時から18時という時間帯（冬場は16時から17時）で見回りをしています。

私たちの活動は、この見回りで見つけた方もそうですが、ほとんどは設置されてあるいのちの電話からかかってきた人に対して行動するというような活動をしています。三段壁の絶壁の上でなんども行ったり来たりしながら悩んでいるうちに看板を見て、やっぱり電話してみようと思った方が電話をかけてくる。いまは警察もそこに臨時交番をたてて直通電話をひいていますので、その電話で警察に直通電話をしてなんとか保護を求めている人もいます。大体私たちのNPOと警察と同じ数くらいの人を保護していると思います。もしかすると警察の方が多い年もあると思います。

ところで、その保護した方をどうやって自立させていくかということが問題になるわけですが、それが私たちのところの大きな役割です。就職口もそんなにたくさんあるわけじゃないんですけども、なんとかその人がやりなおしていくには、仕事とか収入が必要ですし、住んでいく場所も必要です。そこをなんとかフォローしていきたいと、今は教会を開放し、そこに仮住まいしてもらって、そこから自立に向けた就職活動をしてもらうようにしています。5～6年前に白浜町がそうした人たちのためにアパートを貸して下さって、今はそこにも住んでもらいながら、自立に向けた取り組みをしてもらっています。

さらに今は和歌山県からも1つ物件を私たちに下さるということで申請中ですが、今度つくられた基金を活用して、そうした物件を購入するなり借りるなりするという方向で話しあいをしています。³

三段壁を抱えているという関係から、行政も警察も自殺対策に関してはもともと意識は高かったと思うんですけども、自殺に対する社会の関心の高まりとともに、さらに何ができると、とても前向きなものになってきているんじゃないかと思います。

ただ、現実には問題は複雑でやらなければいけないことが多く、担当の方々の苦勞というのは本当に大変なところがあります。

またここも観光地ですから、その観光の特徴を活かしていくということとの悩みもあります。今年9月に、事故防止のために三段壁には柵がついたんですけども、観光資源としては突端まで行って下を覗き込めたほうがよかったという意見もあって、そのへんが今、問題になりつつありながらがんばっているところですね。

佐藤修

ありがとうございました。東尋坊も観光地ですよ。そこが非常に悩ましい話ですね。青木ヶ原樹海も同じように観光地ですが、日原さんのところでは、むしろ観光地であることも活かしな

から、行政が中心となって観光関係の人たちも巻き込みながら展開していますね。

日原和美（富士河口湖町役場福祉推進課課長）

山梨県は平成 19 年、20 年と自殺率 2 年連続全国ワースト 1 でした。それも私どもの富士河口湖町と隣の鳴沢村にある青木ヶ原樹海が数値を引き上げていたという現状です。ところが青木ヶ原の自殺者の多くは県外の方であるため、私ども地域に住んでいる者は自分たちの問題として捉えにくく、そのためこの問題への意識がとても低かった状況です。

そこで最初はどうなことをしていったらいいんだろうかということで、いろいろ考えたんですが、いずれにしても地域全体で考えていかなければいけないということで、まず行政が、地域の商工会や観光業者、民生委員さんなど、地域の関係者に声をかけまして、「いのちをつなぐ青木ヶ原ネットワーク会議」を立ち上げました。それが平成 20 年の 6 月でございます。

まだ、ネットワーク会議も 1 年ちょっとの赤ちゃん状態ですが、その中でどんなことをしていったらいいんだろうかということで、みんなで話しあいをした結果、青木ヶ原は 3000 平方キロメートルという非常に広いところですので、パトロールといってもそれも無理だろう、柵といっても、あそこは国立公園の自然公園法の特別地域でいろんな工作物をたてるのにとっても規制がある。そんなことでハード面ではきびしいな、というところで、この青木ヶ原のもっている負のイメージ、自殺の名所、というイメージを変えることによって、ここは自殺をするところじゃないんだ、命を捨てるところじゃないんだ、ここから命をもらう場所なんだ、というプラスのイメージチェンジをはかることが、ここ青木ヶ原樹海での自殺防止対策にしていこうということになりました。

ポスターも死とか自殺とかという言葉は抜いて、青木ヶ原樹海の大自然からいのちの元気をもらおうという方向に変えました。

また多くの人たちに関心をもってもらうために、私もいまつけておりますし、会場のみなさんも何人かつけてくださっておりますが、自殺防止に私たちは取り組んでいますというピンバッジを作成しました。

観光面では、観光業者のみなさんもういぶん協力をしてくださいまして、声かけ運動のためのボランティア養成講座も多くの人たちが参加してくれました。ネイチャーガイドプランというのも作りまして、青木ヶ原樹海をウォーキングすることによって、大自然のいぶきをいただきましょう、というプログラムも作りました。

こういう形で、青木ヶ原樹海を抱えている町として、青木ヶ原のイメージアップ作戦という方針で住民のみなさんと一緒になって活動をすすめています。

佐藤修

ありがとうございました。私たちも青木ヶ原に寄せていただきましたが、茂さんだいぶ感じが変わってましたよね。

茂幸雄

そうですね、本当に地元の皆さんが一丸となって取り組んでいるという感じを受けました。

佐藤修

ちなみにみなさん方の今日受付でバッジをお配りさせていただいたと思いますが、このバッジは日原さんからのご提供です。

3つの活動をご発表いただきましたが、実はこうした3つの活動がこれまでつながっていませんでした。それぞれ各地でばらばらにやってきていた。それが数年前から少しずつつながりだし、今日はみなさんに一堂に会していただいたわけですが、つながってみて何か学んだこと、気づいたことはあるでしょうか。

藤藪庸一

僕が茂さんたちの活動とつながったのは、3年位前だと思うんですけども、茂さんから電話があったんですね。電話をいただく前から新聞やいろんなところで茂さんの活動というのはもちろん知っていましたが、電話があったのがはじめて、お話しができたという、そういう感じにつながったんです。

茂さんが警察出身だということも知って、僕も警察との関わりがある中で、警察官でもこういうふうな活動に発展させていく方がいるんだな、というのが、まずの第一印象です。そして同じような問題を抱えて、同じような活動をしているということを知って、僕はやっぱりはげまされるというか、共有できる何かがあるなっていうことをすごく感じました。

佐藤修

それぞれ微妙に取り組み方が違って、お互いに学びあうことっていうのは、たぶんたくさんあるんじゃないかな。

藤藪庸一

ありますね。まあ、茂さんと僕との性格の違いということも含めてですね、すごくこう刺激を受けることが多いですね。

佐藤修

日原さんは最近、茂さんや藤藪さんを地元にお呼びして、いろんな活動をされていますね。

日原和美

はい。「いのちをつなぐ青木ヶ原ネットワーク会議」では、地域のみなさまに声かけ運動を広げていきたい、ということでボランティア養成講座を開催していますが、今年の講師が茂さん、今年が藤藪さんです。そこで2人から地域の皆様にお話をいただきました。そういったお話しの中から、やはり私たちはまずイメージアップ、声かけという第一段階から取り組むことにしました。これからいろんな課題が出てくると思いますが、茂さんや藤藪さんの取り組みからいろいろのことを教えていただきたいなと思っております。

佐藤修

茂さんも青木ヶ原に行って、学ぶことはありましたか。

茂幸雄

青木ヶ原は去年も見せていただきました。その時は、樹海入り口のチケット売場の人に、このあたりは自殺の名所って言われてますがどうなってますか？って訊いただけで、ここは自殺場所でないよ、あんなもの勝手に映画やらテレビがつくって映像流しているだけで、全く違うよ、という感じで、門前払いというくらいにつっぱねかたをされました。

ところが、今回行った時は、実はこうですよ、ってということで、地元の人が本当の実態を話してくれましたし、ちょうどそこにタクシーの運転手さんがおられたのですが、その人たちからも、ここから中に入ったところで、ボランティアの人たちが立っていて、そこで話を聞いてますよ、ということも話してくれました。そうやって今対策を講じてきたから、地元の人が堂々とお話しができるようになったな、素晴らしい変わりようやな、ということを感じました。

佐藤修

茂さんは今回7か所を見てまわられたんですね。

茂幸雄

青木ヶ原を含め、自殺多発場所とされているところを7か所、みんなと一緒に視察させていただきました。

7か所みてもね、一番自殺の多い福井の東尋坊の断崖が高さで言えば一番低いんですね。25mです。三段壁は42m、足摺岬は80m、錦ヶ浦が80.私のところが一番低いにも関わらず一番多いんですね。年間20名から30名の方が亡くなっている。どう違うか、ということなんですよ。

これはもう歴然としている。観光地という大きなひとつの根っこがあって、私に言わせれば間違った感覚で、観光だけを大事にして人の命に対してあまり力をいれていないといえますかね、それが私としては非常に情けないのです。行政や地元の取り組みが違うということです。

私は警察にいた現職の当時から日本全国あちこちに自殺の名所、多発場所があるということは知っていました。全国にある。そういうところでは必ず自殺を防止するなんらかの活動がされていると思っていました。それで、定年をむかえてこういう活動を始めたんですね。しかし、ふたをあけてみたら藤藪さんしかやっていた、あの時には驚きでした。これだけの方たちが亡くなっているにも関わらず地元の人たちが何にも動いていなかった。

そうしたなかで、青木ヶ原の富士河口湖町に行ったのですが、町長さん、すごいですね。先頭に立って120名の指揮をとっているんですよ、民間ボランティアの人を養成して、そして取り組みを開始した。あの時の町長さんの開口一番の言葉なんですけどもね、地元の人には誰も死んでいない、みんな他県の者ですよ、しかしこれは今まではどうであれ、これを私は許すわけにはいかん、と言って立ち上がったんですね。あの時の言葉は私の心に今でもずしっと感じております。そして三段壁の町長さんもね、私しんとこの人は本当に少ないんですよ、でもこれをほっとくわけにはいかない、というのです。行政の首長さんの姿勢ひとつで、ころっと取り組みが変わっているということですね。改めてそういうことを感じました。

佐藤修

今回お話のあった3つの事例には共通点もあれば違いもある。行政の姿勢もそのひとつです。また、茂さんや藤藪さんの活動が続けられているのは、そうした活動を支援する人たちがたくさんいるということですね。

もちろん日原さんのところも住民と一緒にやってはじめていますが、重要なのは、さきほど藤藪さんから思いとどまった人の住む場所、働く場所という話がありましたけれども、茂さんもそういう場所を提供してくださる人たちに支えられている。そこがとても重要なところですよ。

日原さんのところはまだそうした体制、私たちは「シェルター」と呼んでいます。その部分を支える仕組みがまだ十分育ってない。そのために思い切って取り組みを広げにくいということもあるのではないかと思います。この部分は行政だけではなかなか取り組みにくいところかも

しれません。

実は今日は会場に、自殺を思いとどまった人たちに、暮らす場所だとか働く場所を提供するような活動をされている方が来てくださっています。そこで、お2人の方からお話をさせていただこうと思います。まず、藤田さんからどういう思いでどんな活動をしているのかをお話ししていただけますか。

藤田真宏（シェルター実践者）

こんにちは。藤田と申します。今日、私は名古屋からお邪魔させてもらっています。私はまあ、一般のサラリーマンなんですけども、私たちの会社は昨年未から世間をにぎわしている派遣会社でございます。

みなさんもいろんなイメージをもたれるかと思いますが、派遣会社といってもいろいろあるかと思うんですが、私たちの会社の基本理念といいますのが、学校を卒業して就職し普通は終身雇用という状況が大きく変わってしまい、そうしたなかで、最近何かかんかの要因でそういう軌道から離脱した方が、再就職する場合、すごく苦労されている。そうした状況のなかで、一回挫折した方がまたいい会社に雇ってもらえる架け橋になりたい。そういう会社でありたい、というのが私の会社の代表がよくいう言葉です。派遣社員の方は当社にも大勢みえるんですけど、まあ、それぞれの実績を活かして、仕事ができるように、それぞれの就職支援を応援したいという形で今業務を営んでおります。

そんな中で、平成20年の1月だったと思うんですけども、報道で茂さんの活動を見させてもらいました。たまたま私の会社の代表も同じ番組を見てまして、翌日、私が出社したらその話が話題になりまして、私が茂さんの所へ行って話を聴いてくることになったのです。そんなわけで私がこう飛び込みで茂さんの元をお邪魔しました。

自殺を思いとどめさせるだけではなく、じゃあ次どうするんだっていう時に、私財をなげうってその支援を茂さん自身がされている、というところに私すごく心が動きました。私たちの会社は、全国に2000位社宅をもっています。職場も600近くある。私たちは今、世間をにぎわしている製造業への派遣がほとんどを占めている関係で、いろいろな仕事がある。そうした会社として、なにか茂さんの活動の役にたつことができないうらうかと考えました。茂さんも私たちの会社の、社会貢献という考え方に非常に共感してくださり、昨年5月にはじめて一人の方を紹介してもらいました。それ以来、いろいろと支援させていただいています、先ほどもお話したように、きっかけは茂さんが私財をなげうってでも人の命を助けようというその言葉に感銘を受けたというだけです。

佐藤修

茂さん、うれしいですね。こういう人たちが茂さんたちの活動を支えているんですね。続けてもうお一人、佐藤洋司さんからもお話をお聞きしたいと思います。佐藤さんは座ったままでお話したいというので、そのままお話下さい。

佐藤洋司（シェルター実践者）

座ったままですみません。私はホテルをやっています。あんまりうまくしゃべれないと思いますが聞いてください。私は24歳の時に友達を自殺で亡くしました。他にもその後、自殺で亡くなった人がいます。で、このまんまじゃいけねえなと思いつつ、高校の時の同級会にでたら、先生からちょっとバレーのコーチをしてみないかということで、まあ、高校のバレーのコーチをす

るようになりました。

バレー部自体も問題でしたが、いろいろと問題をかかえた子が多かったもので、まあ、ひきこもりもいたり、家庭内暴力もあったり、いろいろありました。そのうち、そうした問題にかかわって、夫婦のなかにはいたり子どものなかにはいたり、いろんなことをするようになりました。まあそこでいろんな勉強をしていったわけです。そのうち、俺が「・・・だんべ」という方言をつかうもんだから、だんべ先生って言われてたんですが、「だんべ先生ならなんとかしてくれるよ」っつー話の輪がどんどん広がって行って、いろんな地域からあそこにああいう人がいるからいいよって言うふうになんて言われて、仙台とか京都から流れてきて、所持金がなくて、とか、借金もあってとか、どうしようもなんねえっつう人が相談に来るようになり、そんなことを6、7年やりましたかね。

京都から来た子なんかは、サラ金からお金を借りてて追われてて、その間にも入って、やくざさんとも話し合いをして借金もペーにしてやって、で、うちでまあ2年間働いて、借金取りもけえへん、お金もためて、その人は今東京で新聞配達してがんばって働いています。

で、まあ、そんなことしている間に、家中の猛反対があって、ボランティアはいいけども自分の命が終わっちゃうぞ、っていう話になってきてしまったのです。事件を起こすのはみんな夜が多いもので、夜も眠れない。で、しばらくやめてたんですね。しかし、どうももやもやしてたんですが、そんな時、茂さんのテレビを見て、自分の中で心が騒いだんです。それで、もう一回やろう、というわけで、私の方から茂さんに連絡をとって、茂さんの活動拠点に行ったんです。そうしたところ、ちょうど茂さんの所に自殺を思い留まった人がいたんです。そして、その人の面倒をみてくれないか、っていうことになり、6月24日から一人の女性を預かることになったんです。マイナスからのスタートだったんですが、貯金をためて、実家に帰っていきりました。しかしその実家にもいろいろあって、そこまで私も行ってきました。いろいろやっていますが、まあ、自殺防止のためなのかなあ、と思っています。

私は知識がなかったもので、こんなふうに、いろんなことをやってきました。そのなかで、サラ金との付き合い方なども学んできた。いろいろと生きていく上で必要なことを学ばせてもらった。だから、そうした活動を通して、私も勉強させてもらっているな、っていう、感じをもっています。

私も辛いことだってあるし泣きたいことだってあるんですけども、そういう子たちが一緒にいるので、この人たちのいるところでは泣けない、自分もがんばらなきゃと思うので、いつもがんばってやっています。話し出したらきりが無いんで、この辺でやめます。

佐藤修

ありがとうございました。やっていて自分も得ることがあるということですね。楽しいといっ
ていいかわからないけれども、そういういいこともある。だから、続けられる。

佐藤洋司

はい。そうです。

佐藤修

藤田さんもやってみて、よかったことっていろいろありますよね。

藤田真宏

そうですね。でも最初は、もう緊張の連続ですね、私自身がもともとそういう気持ちがわからない人間だったので、もう最初は緊張して緊張して夜も眠れないし、はじめて受け入れさせてもらった時は、その人に2週間ずっとつきっきりでしたね。その人の笑顔が見えた時、やっと安心しました。

よかったことっていうのは、みんな今は普通に話してくれる、それに笑顔が絶えないって言うことです。仕事の時はもう汗をかいてがんばってくれているっていう姿をみることです。

茂幸雄

こういう人たちがいるから、私は岩場でね、死んだらあかんよって言えるんですよね。彼らから返ってくる言葉は、じゃあどうしたらいいの？って。それに答えられなあかんですね。死んだらあかんと言う言葉は誰でも言えますよね。で、どうしたらいいの？って言う言葉が必ず返ってきます。たそれで福祉課へ引き継ぎます。しかし現実には先ほど話した状態ですね。再出発できないんですね。となればどうしたらいいのか。そこに、おふたりのような人たちが、私のところで何とかやってみますよと引き受けてくれたんですね。それも自分から名のりを上げてきてくれた。とても嬉しいですね。実は岩場で立った人は何か月も何年も悩み、悩んだ末に自殺まで考えてた方たちなんです。そんな人をもう一度再出発させて貰えるのかと心配してお願いするんですが、引き受けてくれる皆さんは、いいですよ！、と簡単に言ってくれていますが。もちろん再出発に当たっては、いろんな問題がおきています。

さきほど寝られなかった日が何日も続いた、と藤田さんはいいましたが、そういう状態になるんです。そうであっても、こういう理解のある人たちはそのなかに入って来てですね、本当にうまいことフォローしてくれるんです。そういう人たちの献身的な活動がなければ、自殺防止活動なんてできませんよね。自殺したらあかんちゅうことは、いえますけどね。

藤田さまには今日までに15~16人の人をお願いしていますね。皆さんが元気で再出発しています。なぜそこまでできるか、こちらこそ藤田さんのご苦労をお聞きしたい気持ちです。

佐藤修

こういう活動が広がっていくといいですね。日原さん、今のお話を聞いていかがでしたか。行政だけではなかなかできないって言うことありますよね。

日原和美

そうですね。福祉の窓口での対応ですが、さきほど茂さんがおっしゃったように、帰るところがあるの？って訊くんです。他に行くところがない、といった場合はその町で生活保護だとかそういった対応をするんですが、できればご本人によく聞いてお友達だとか知人だとかご家族だとかもう一度やり直せる場所があったらそこにもう一度帰ってがんばってみてくださいということになるんです。応援の言葉はかけられるんですが、具体的なつなげかたっていうのができないというのが現状です。で、シェルター役を担ってくれる人たちと行政がつながって、各々の役割を担っていく。協働っていいですか、こういったネットワークが広がることによって、そういったことが少しずつ実現していけるのかな、というふうに考えていますので、本当にこのネットワークの広がりをとっても期待しています。

佐藤修

ところで、そういうシェルター的な活動をやっていて、いろいろ感じることはあるでしょうね。どうでしょうか、社会や行政や他の仲間たち、あるいは世間の人たちに何か言いたいことがあればお話しくださいね。

藤田真宏

まず一番身近なところで私の社内でのこととお話します。茂さんから、こういう人がいるが仕事があるか、と照会を受けて、仕事探しをします。会社の代表からは許可を得ているものの、そうした活動をしていることを社内の人たちにもなかなか理解してもらえない。それがとても辛かったことです。自殺をしかけた人ということで、みんな何か特別な見方をしてしまうところがあるので、そこをどう理解してもらおうかっていうことで苦労した。

でも活動を続けていると、協力してくれる社員が少しずつ出てくる。周りの社員、会社のいろんな関係者、さらには派遣先の会社の人たち、と理解者が広がってきたのです。自殺を考えたとしても、私が接してきた人たちは特に変わっているわけではない。そうしたことがみんなわかってくると、シェルター役を果たしてくれるところがものすごく広がると思うんですね。接してみれば、普通の人と何も変わらないことがわかる。

佐藤修

普通の人と変わらないというのはどういうことですか。

藤田真宏

目線を同じにして、ただ痛みをそうだよなって聞いてあげるだけで、もう笑顔になるんですよ。同じ目線で話を聞いてあげれば全く普通の人なのに、まあいろんな報道もあるでしょうが、何か特別な人たちだというようなイメージをまず変えることが、僕はまず一番にやるべきことだと思う。それが、こうした活動がうまくまわってくる入り口ではないのかなっていうふうに思っています。

佐藤修

藤田さんも、体験を通してイメージが変わってきた。

藤田真宏

正直言いまして、最初は僕も、自殺を考えた人を特別視し、いろんな不安もあった。でも、ただ最初の一人と2週間接するうちに、ああ、意外と何も変わらないんだなと思いました。

生活する上ではだれしも問題がありますね。会社をやめさせられちゃった、離婚をしてしまった、いろんなことがあるんですが、自殺を考えるとというのも、そうしたいろいろなことのひとつのコンテンツにすぎないのであって、僕でもありうるかもしれないし、自殺というものはなにも特別のことじゃないっていう意識になりました。

佐藤修

そこが多分われわれのネットワークの非常に大きなポイントの一つだと思います。意識を変えていくことが出発点かもしれません。

佐藤洋司さんはいかがですか。

佐藤洋司

さっき茂さんも言ってたんですけど、「がんばりな」っていうだけじゃなくて、それぞれの問題を考えてやる必要があります。たとえば、自殺する原因としてお金とか心の悩みとかあるわけで、そこらへんを最初に解決しないと、働く場所が見つかったにしても、その心の悩みはなくなる。だからそういう面で、相談される人もある程度経験がないとだめだと思うんですよ。サラ金だかにだまされて、高利貸みたいな金額を借りていた人の相談を受けた時は、テレビからいろんな知識を得て、こういう時はこうしろっていうのを見てたからわかったけど、でも勇気がいりますよね。やくざさんと張り合う、自分も商売しているんで、嫌がらせされたらどうしようとか、不安がありましたよね。まあ、私はやりましたけど、そこまでボランティアでできる人となると、数も減るだろうし、いろんな難しいことがあると思います。

生活保護もそうだけど、田舎だとなかなか生活保護の申請をしても、そう簡単ではないし、なかなか協力姿勢もないっていうか、そんな余分なこととしてって言われちゃうわけです。そういう態度されるので、ちきしょうと思いますけどね、がんばってやるしかないな、と思ってるんです。なししろ、人の命がかかわっているし。でも、いろんなふうにつながってくるんで、だからどこをどうすればって言っても難しい。

それで、俺が心がけているのは、自分の家族だったら、妹だったらおふくろだったらおやじだったら、ここはこうしなきゃだめだろうって、いうふうに心に問いかけるようにしてやっています。そうすると、だんだん先が開いてくるようになる。まあ、そこらへんで100%とは言わないけども、立ち直る人が多い。

いまは、私のところで自立したら次のところで扱ってくれるところがある。いきなり自殺を思いとどまった人を預かるのはよほど理解がないと難しいということもあるんで、まずは私のところで何か月か働いて、それから酪農に行きたいなら酪農をやってみるとか、農業やりたかったら農業やりたいとか、そういうようにいろんなところにつながってくるといいですね。

佐藤修

自殺を思いとどまった人たちを支援するといっても、いろんな仕方があるわけですよ。それと同時に一番大切なのは、今おふたりが言ったように、自殺を考えた人に対する接し方、見方ですよ、特別視しないということがすごく重要だということですね。

支援するにはいろんな仕組みがあるといいましたが、働く場を提供する、寝起きする場を提供する、それ以外にもいろんなことがありますね。働く場は会社の社長でないと提供できないかもしれませんが、普通の人でもできることってたくさんありますよね。

茂幸雄

ネットカフェっていうんですか、そういうところで朝から晩まで寝泊りしている人がいますね。そういう人たちが何を言うかといいますとね、まず第一に、足をのばして寝たいって言うんですね。そういう場所がない。足をのばして寝たい、そんな場所がほしい。

次に住所です。就職するには住所がないと何処も雇ってくれない。住所さえあればいいんですよ、住所がほしいのです。そして就職ができるまでの間の食事がほしい、この3点ですね。

みなさんはまだまだ死にたくないんです。岩場に立って死のうと考えている寸前であっても、本人は怖いというのです。死ぬのが怖いんです。だから声をかけて欲しいのです。あそこまで追い詰められて岩場に立った人でもね、何をしたいかといえば、再出発したいんです。皆さんが再出発をしたいんですよ。でも再出発できない事情がある。それは何かというと、家庭崩壊や親子

の縁が切れていたり、友だち関係が切れていたりしている。相談をしたい時、悩みごとがあった時に聞いてもらえる人がほしいんですね。独居老人の方が言ってる三大悩み事、困った時、病気をした時、災害にあった時、そういう時に相談に乗ってくれる人がほしい。岩場に立つた人もそういう状態なんです。誰かの手助けが欲しいのです。また誰かに相談したいんです。

藤藪庸一

私のところの活動は、結局近所の人たちが理解をしてくれているので続いている、と思います。ある日、突然に知らない人が自分の家の前を散歩したりするわけですね。うちで共同生活をはじめますから、見知らぬ人、本当にぜんぜん見たこともない人が突然近所に住むわけです。

それで、僕は共同生活をする人たちに必ず言っていることがある。近所で会う人には必ず挨拶をしようということです。まずそれが第一段階なんです。

近所の人たちは知らない人がうちの教会や事務所の方から出てきて、何も言わないで通り過ぎていくと、気持ちが悪かったり怖かったりする。でも、そこでちょっと挨拶ができれば、はじめは挨拶してくれないかもしれないけど、挨拶をするようになる。そのうち、教会さんにお世話になってるんか、とか、そういう言われ方をするけれども、言葉をかけてくるようになる。そして次第に受け入れられていくんですね。

2番目に僕が共同生活の人たちに言っているのが、みんなに理解してもらってここで生活ができるわけだから、近所の雑草ぬきとか、道に落ちているゴミを拾うとか、まあ、ボランティアにでかけよう、っていうことなんです。で、そういうことを何回かしている間にですね、いつもありがとうございます、と言ってくれたりするおばちゃんがでてきたりするんです。そしてコーヒーが届いたりとか、御礼をもらったりとかするようになる。そういう人間関係が広がっていくんです。実はそういうつながりというか、そういう関わりがはじまると、とたんに前向きになりやすいというか、明るくなっていくペースが早くなるというか、自立していくペースも早くなると思います。

近所の人たちも、そういう形で受け入れてくれているので、以前、近所で空き巣事件があった時に、僕はうちが完全に疑われると思って覚悟したんですけど、誰一人うちにそういう話をもってきた人はいないんです。やっぱりみんなの本当に理解があって、何とかこういう活動が続けられるんだな、と実感しています。

佐藤修

藤田さんや佐藤洋司さんのような支援役ばかりではなくて、ただ声をかけることだけでも非常に大きな支えになるということですね。それであれば私にも誰にもできますね。

実は今日は会場に、自殺を思いとどまった人も参加して下さっているんです。そこで、ご本人の了解を得まして、その体験をちょっとお話していただこうと思います。

本名を呼ぶのはちょっと差し控えさせていただき、また座ったまま前を向いてお話しをしていただこうと思います。おふたりの方、よろしいですか？ 大丈夫ですね。気楽にいきましょう、では、Aさんと呼ばさせていただきますが、Aさんからお話しいただけますか、Aさんは東尋坊に行ったわけですが、なぜ東尋坊にいったのか、自殺を思いとどまった理由ではなくて東尋坊に行った理由をまず話しいただけないでしょうか。

Aさん(フォワード)

4、5年前にテレビで茂さんたちが保護した方の番組を見てまして、東尋坊にはこういう親身になって相談にのってくれる人がいるということを知っていたんです。3年前ですが、最初は青

木ヶ原に行くことも考えたんですけども、どこかに自分はまだ生きていたいという気持ちがあって、それで、東尋坊に行ったら茂さんに会えるかもしれない。もし茂さんがほんとうに親身になって相談に乗ってくれる人でなかったら、もう、ここでと思っていたんです。ちょうど晴れた日だったんです。それまでずっと雲行きのあやしい荒れた人生でしたから、最後くらいは天気のいい日にいこう、とっていました。

佐藤修

そこで茂さんに出会ったんですね。茂さんたちに出会ってどうでしたか？

Aさん

茂さんと川越さんと1時間か2時間くらいいろいろ話ししまして、ああ、この人だったら自分の相談ごととかにいろいろのってくれると思いました。私は小学校頃に両親2人とも、病気で亡くしているんですが、もう最初会った時に本当に父親以上の存在に思いました。一番甘えたい時に両親を亡くしていますから、ずっと寂しい生活をおくってきました。おふくも小学校5年の時に急性心不全という病気で亡くしましたが、その時に、親戚のおじさんおばさんに、しょうがねえから引き取ってやるって言われまして、高校を卒業させてもらいました。自分としては、自分と同じ環境の人のための施設があるっていうことを知ってましたから、そういうところに入れていた方がよっぽど幸せだったのかな、とも思いましたし、学生の頃からずっといじめられてきましたし、あ、内容変わっちゃいましたね。

佐藤修

思い出させてしまいましたね。大丈夫ですか。ではBさんに少し話してもらいましょう。Bさんはどうして東尋坊に向かわれたんでしょうか。

Bさん（フォワード）

自分も最初は会社の旅行で東尋坊に行きました。その時はいいとこだなと思ひまして、その後も2、3回行きました。ところがその後、会社をリストラになりまして、いろいろとあって、もうこの際、東尋坊に行こうと思ったんです。そこで、声をかけられました。

佐藤修

東尋坊で茂さんたちが活動されていることはご存知でしたか？

Bさん

その時は知りませんでした。

佐藤修

お会いになってどうでしたか。

Bさん

よかったです。もう全部打ち明けて、その時は心を救ってもらったようで、また生きようって考え直しました。

佐藤修

お二人とも茂さんたちに会って、やはり生きていこうという気持ちになったということですよ
ね。

Aさん、Bさん

はい

佐藤修

そうやって今、おふたりとも元気でやられているわけですが、思いとどまってから自分が元気
になってくる、前に向かって進めるようになったのは、何が一番の契機になったのでしょうか。
元気をもらえたものはなんでしょうか。

Bさん

自分は、それまで誰にも相談する人がいなかったのですが、相談に乗ってくれる人たちができ
たということです。

佐藤修

そういう人のつながりができてきたってということが大きな支えになった。

Bさん

そうです。

佐藤修

Aさんどうですか？

Aさん

命の尊さの意味はいまだにわからないこともたくさんありますけども、今日生きたくても明日
生きたくても生きられないっていう人もこの世界には何百人何千人っているっていうのをやっ
ぱり自分で深く考えなきゃいけないでしょうし、助けてくれた茂さんたちも、私だけじゃなくて
たくさんいろんな方たちのことも考えなくてははいけませんし・・・

佐藤修

そうですね。Aさんだけではない。ところでAさん、いま少し前のご自分たちと同じような
人に会ったら、何か言ってやりたいことたくさんありますよね、どうですか。

Aさん

自分の体験話をしたからその人が自殺をとどまるっていうことにはならないと思いますけど
も、体験話をして、それが役に立てばと思います。

いまテレビでもお笑いがブームになっていますけど、私のように自殺を思いとどまった人のド
キュメンタリーをもう少しとりあげていけば、世の中にはこんな人がいっぱいいるんだというこ
とを知ってがんばろうという気になる人もいるかもしれない。自分も一度は施設に行って、そう
いう人たちとお話をしてみて、自分を超越ることができた。

私はいま35歳ですけども、こうやって生きてきた。今は不景気で就職先もないって聞いてますけども、プラス思考にがんばって生きていこうってことを言いたいです。

佐藤修

茂さん、もうかわいい息子みたいなもんですよね、おふたりとも。

茂幸雄

2人の話を聞いていると私が何か特別な人間のように聞こえると思うんですね。でも私は特別のことをやっているわけではない。話を聴いていますが、何もしてないんですよ。自分の家庭もありますし、今日まで215名ですか、たくさんの人と出会っていますから、一人ずつに何かできるわけではない。そのことをみなさんが理解してくれているんです。ですから本当に困った時だけ電話の相手をしてあげればいいんです。

Bさんはいま東京で再出発しています。Aさんは、関東出身ですが、福井の方で再出発という状況なんですけども、そういう何も知らないところで再出発する時には、何かあったら、最後に相談できる相手がいる、それだけでもう十分元気になれるんですね。そういう顔のみえる相談相手がいればいい。みんなが相談相手になれば、みんな元気になってもらえるんじゃないかな、と思います。

佐藤修

そうですね。ある意味ではだれもが茂さんになれる、っていうことですよ。でもなかなかそうはならない。茂さんは2人にとってやはり違う存在だった。

ところで、またAさんBさんにお聞きしたいんですが、ご自分の体験から、こんなことがあったらいいんじゃないか、みんなこんなことをしたら自殺を思い立つような人はいなくなるんじゃないか、思いとどまる人は増えるではないか、ということがあれば、お話しただけないでしょうか。何でも感じたことでいいんですけども。まあ、茂さんのような人が世の中にもっとたくさんいたらいいのかもしれない。

Aさん

まあ、それもありますけども、メディアっていうのはものすごい力があるっていうか影響されますから、そこにもお願いしたいですね。

私はこれまで、東尋坊と青木ヶ原しか知らなかったんですが、今日はじめて和歌山の三段壁のことを知りまして。自殺のそういう場所が結構日本にはあるんですね。そうした自殺に関することがあまり知られていない。いま年間3万人を超える自殺者がいるわけですから、わが身にいつ降りかかってくるかもしれない。でもみんな、自殺はだれか他の人のことだと思っている。自分にもつながっている問題だと思えば、他の人と協力していこうっていう姿勢がでてくる。支えあって生きていくのが人間であって、誰であろうとやっぱり一人だけの力では生きてはいけません。

シェルターなんかでも、女の人のシェルター施設はいっぱいあるって聞きますけども、自殺は圧倒的に男性の方が多いっていいですよ。でホームレスになった方でも知らんぷりとか、なんか人間扱いされないとかです。もう少しそういうシェルター的な施設がたくさんできることも願っています。

あとやっぱり仕事ですよ。年齢、年がいけばいくほど、やっぱりリストラだとかそういうのが多く、次の働き場もみつけにくい。

佐藤修

ありがとうございます。やはり社会の問題として考えていかななくてはいけませんね。藤田さんはいろいろシェルター活動をやっていて、いろいろ感じられていることも多いと思います。先ほどは働く場の提供もさることながら、みんなの意識、人の見方を変えることの大切さをお話しされましたが、社会のあり方に関してのご意見をお持ちかと思いますが。

藤田真宏

これは私の考え方なのですが、働く場での人の意識もそうなんですけど、それよりももっともって根源にあるのは教育ではないかと思います。道徳とかそういうものが、今の日本から消えつつある。そういう道徳的な教育も含めた部分で、もっともって力をいれていかないと不幸な人がどんどん増えていってしまうんじゃないかな、という気がします。仕事っていう部分も大切に、当然、ないよりあった方がいいんですけど、そういう根っこには教育という問題にどうしてもたどりついてしまいます。

佐藤修

ありがとうございました。いろいろとお話をお聞きしてきましたが、パネリストのみなさんはそう感じたでしょうか。

日原和美

みなさんのお話を伺っていて、命の重さというのを本当に強く感じました。私どものところでは、先ほどからみなさんおっしゃっていた、つながり、声かけ、そういった人と人とのつながりから、活動を進めていくということで、ボランティア養成講座をやっているわけなんですけど、今年は120人の受講者がございました。さらに11月にもあと3回予定をしていますが、それは鳴沢村の民宿や旅館のお父さんやお母さんを対象にした出前講座を考えています。地域の現場にいる方たちにそういう気持ちや意識を持っていただいて、声をかけていく、そうした地域の力を強めていきたいというふうに考えています。

道徳とか教育とかというお話がありましたが、私も本当に深く同感をいたします。まあ、行政の立場としては、人権教育、人権意識想っていいですか、子どもたちへの啓発活動をこれからの学校教育の中でももっともっとふくらませていかななくてはいけないと考えています。

藤敷庸一

私自身つくづく思っていることは、行政の方々が担当する範囲というか、責任をもってもらえる範囲というもの、私たち普通の市民というか、私たちの個人個人として責任をもたなければいけない範囲というのが、もう少し明確になってもいいのではないかとことです。行政ですべてをやらなきゃいけないと言い始めると、それは絶対に無理だと思います。で、私自身は、行政でできない部分はどこなのかということをおみなさんに考えてもらいたいと思います。行政はどうしても平等に、平等にと考えなくてはいけないのですが、この自殺の問題は絶対に平等になんて扱える問題ではないと思いますので、必ずそこにひずみがあるんです。でも、私たちの気持ちの問題で、みんなが関わっていこうと考えて、行動を起こしていくことができれば、行政にとっては大きな力になっていく。行政では向き合えない、というか、行政では手をだせない隙間にですね、私たちは入っていけるんじゃないかな、とつくづく思っています。

佐藤修

道徳とか教育という言葉がでましたけれども、藤藪さんが今おっしゃってくださったように、道徳とか教育といわなくても、私たち一人ひとりの生き方とか考え方をちょっと変えるだけで、できることはたくさんあるということですね。

藤藪庸一

あります。あります。

佐藤修

行政のせいにしてたり、企業のせいにしてたり、ではなくて、行政のやれること、企業のやれること、NPOのやれること。

藤藪庸一

そうです。そして私たちのやれること。

佐藤修

そうですね。私たち一人ひとりがやれること、そういうことをもっともっとみんなが受け止めて取り組んでいく。そして、それらがつながりながら、お互いに支えあっていければいいということですね。茂さん、いかがでしょうか。

茂幸雄

こういう具合にね、私の活動がテレビにでると、全国から私のところへたくさん集まってくるんですよ。そうすると地元の行政から、お前もうテレビにでるな、新聞にでるな、町がパニックになってしまう、ということをしょっちゅう言われております。

1週間前に地元の警察が発表したんですけど、今日現在で今年は例年の3倍の人を保護した。私のところでも、もう今現在45名の方と遭遇しました、もうすでに昨年をオーバーしています。三段壁についても先ほど聞いたら、もう倍以上ということなんですね。

みんな集まってしまっパニックになってしまうという。それも一理ある。地元としては大変なんです。それもわかるんです。しかしこれは人命救助ではないの？ とそう思ったら、人間として人を助けるということはもう最高の喜びであるはずなんですね。そうでなければいけない。国民の奉仕者であるべきで公務員として、最高の奉仕ができるんでないのか。

もし川で人がおぼれていたらその人を助ける、これだけが人命救助ではないということをもっともっと世間の人にわかっていただきたい。

この前大きく新聞にでたんですけども、JR西日本でね、車掌さんが切符確認をしたんですね。そうしたところ63歳の女性が、東尋坊はどうやって行ったらいいんですかと聞いたんだそうです。で、車掌さんはおかしいってということで、福井県警に電話して、こんな人がおって自殺するおそれがある、と伝えたんです。警察が岩場を見に行ったら、今まさにその女性が飛びこもうとしていた。それで助けたというんです。新聞で大きく人命救助として表彰されていました。

群馬県でもありましたね。自殺多発場所として有名なつり橋がありますが、そこを家族連れでドライブをしていたところ、そこに女性が一人佇んで居るのを見付けたそうです。これは危ないと思って車を止め、その人から話をお聞きしたところ自殺を考えていたことがわかり、警察署に

連れて行って自殺をくいとめたというのが新聞に出ていました。これも、まさしく人命救助なんですよ。

もちろんシェルターの人たちがやっていることも人命救助だと思います。目の前でおぼれようとしている人を助けることだけが人命救助じゃない、というそういう意識ですね。特に政治家や公務員の人、更には自殺多発場所と言われている場所に住んでいる人たちは、このような意識改革をする必要であると思うんですね。

東尋坊へ全国から自殺を考えて大勢の人が集まって来ているのです。そんな人たちを助けることができたら最高でしょ。人間として、私は最高の出来事と遭遇させて貰っている、と思うんですね。しかし、現実、逆です。「お前もうええかげんにせえよ」といわれてます。観光地であるということがあり、まあそうした地元の感情も寸借しなければならないとの戦いがあるって、私も非常に辛いところがあるんですね。

佐藤修

Aさんは茂さんのことを知っていて、茂さんに会いに東尋坊へ行ったんですね。東尋坊のことを知ったから東尋坊に行く、茂さんに相談に乗ってほしいから東尋坊に行ったわけですね。茂さん、いまや日本中どこで自殺が行われていてもおかしくないような状況かもしれないですね。東尋坊が見えるからそこに集まる。

茂幸雄

そういうことなんですね。東尋坊だからこそ、こういうことができるんだということを地元の人みなさんに認識していただきたいと思うんですね。

でも、みなさんの住んでる地域の、みなさんのすぐそばにも、東尋坊のようなところがあれば死にたいという人がいると思うんです。でも誰にも言えない。東尋坊にすれば、声をかけてもらえる、そこで「死んだらあかんよ！」ということで、その悩みごとを聞いてやる。そしてその後を支える。それができれば、みなさんが元気で再出発できるんですね。

東尋坊だからそれができるんだ、という特別な扱いをしてしまうと、みなさんの地域に住んでいる死にたくなる悩みを持っている人の支援ができなくなってしまう。声をかけるのはたいして難しい活動ではないのです。ものすごく大変なことだと思うでしょうが、彼らだって生きたいんですから。それにこちらの限界も十分知っていますからね、相手の方も遠慮しながら、自分がんばらなあかんていう気持ちが十分にありますが、なにもかもおんぶにだっこしてくれってくるようなことはありません。でも皆さんは考えすぎてしまうんやね。みなさんが頭で考えている部分と現実の中に大きな違いがあると思います。

佐藤修

それは藤田さんも体験してわかったことですね。頭で考えるよりも実践ですね。

ところで、今日は自殺多発場所での活動者サミットとなっていますので、青木ヶ原、三段壁、東尋坊、という3か所の方が集まって下さったんですが、自殺多発場所というのは、新聞で話題になるようなところだけではないんですね。

そこには全国から集まってくる。言い換えれば、そういうところにやってくる人たちは日本中どこにでもいるわけです。ですから自殺多発場所ということも、もっともっと広い視点でとらえなければいけない。自殺多発場所をどう考えるか、これはこのネットワークの設立準備会でもずっと議論してきたことです。そのあたりを事務局長の福山さんからちょっとお話しいただけない

でしょうか。

福山なおみ（自殺のない社会づくりネットワーク事務局長）

調査でも出ていますが、ある県では6割以上が自宅や納屋であったりしています。また地元ではうわさになっているところもありますが、そうした場はなかなか話題にはならない、というか、そうした情報はなかなか外部にはだされない。

先ほどメディアの話が出ていましたが、メディアの影響は非常に大きいと思います。残念だと思うのは、そのメディアで放映されないと支援の目が向けられずに、報道されて有名になったところしか支援がない。それは大きな問題ではないかなと思います。

したがって、今回お話しいただいているような、ゲートキーパーとしての立場、それから自殺未遂を体験された人、シェルターとしてやってらっしゃる方、こういった人たちの真の思いを聞きながら、私たちが、たとえば家であったり、学校であったり、職場であったり、病院であったり、さまざまな暮らしの場や職場で、みんなが自分にできることを考える。そしてつながるだけでなく、実際に支えあう行動に移していかないとこの問題は永遠の課題になるのではないかな、というふうに感じています。

佐藤修

このネットワークが考える自殺多発場所というのはもう日本中いたるところで、どこからも自殺をなくしていきたい、ということですよ。逆に言えば、いたるところで茂さんや藤藪さんのような活動ができるっていうことですね。会社でもできる。佐藤洋司さん、藤田さん、会社でもやれることっていろいろありますよね。みんなそれぞれやれることがたくさんあるのではないかな、ということがすごく大切なことだろうと思います。

福山さんから話しいただいた多発場所を広く考えようということについて、日原さんどうですか。行政のお立場だと広く考えざるをえないということもありますよね。

日原和美

そうですね、話題になるところばかりが自殺の場所ではないということが本当にわかります。先ほど、道徳だとか教育だとかというお話がありましたが、子どもたちの教育の時点で、命を大切にすることとしっかりと伝えて、どんな時にも、どんなことがあってもそういう思いをもって生きていくってことが大切だということを伝えていくことも、自殺防止の活動ではないかというふうに考えます。

私どもは現場ですので、地域の皆様と力をあわせて地域の力で少しでも自殺企図者に声かけをして救えるような地域づくりをしていきたいと思っています。富士川口湖町、青木ヶ原樹海は、命を捨てる場所ではなくて大自然の命が生まれたところ、本当に心癒される場所というように、とっていいイメージを持っていただき、自殺が目的ではなくて、心を癒されるために、命をいただくために訪れてみたい場所にしていきたいと思っています。

今日皆様にもお配りしたこのバッチをみていただいて、命をつなぐネットワークの輪が大きく広がっていくことを期待しています。

佐藤修

青木ヶ原の日原さんたちの活動は今日お配りした資料にも書かれていますので、またあとでぜひお読みいただければと思います。今日お話しはありませんでしたが、手引書もつくっているん

ですよね。入り口に置いてありますので、ご関心のある方はぜひ日原さんにお問い合わせください。こういうものがどんどん広がっていったらいいですね。

藤藪庸一

私が活動している三段壁は去年、21名の自殺者がありました。でも、となりの町の田辺市は、たしか26名の自殺者がありました。多発場所だといわれているところよりも自分の町の方が自殺者が多いかもしれません。和歌山市では131人の方が亡くなっています。実際、どこでも自殺は起こります。こうしたデータからも本当に自分の身の周りでも自殺の危険があるということがわかるんじゃないかと思います。

それから教育という観点、私も本当にそうだと思うので活動しています。今日も参加していますが、私と一緒に活動している山本良作という副理事長と一緒に、予防という視点から、子どもに対する活動を大いにやってみようと考えています。地域の大人で子どもを育てるということを通して、子どものうちから人間の関わりを何とかつくりあげたい、そうした地域をつくりあげたいと思って活動をしているんです。

多分、みなさんの周りでも、その地域地域で自殺防止というか自殺予防というか、そうしたことにつながるができると思いますし、すでにやられているかもしれません。声かけの中で、あれ、この人今日なんか元気がないなっていう気づきが生まれてくるんじゃないかって思います。私はそんな感じで考えています。

茂幸雄

私たちのNPO法人の名前をいっぺん考えてみてほしいんですね。NPO法人ところに響く文集・編集局というんです。それって自殺にどう関係あるの？ということなんですね。日原さんたちがマニュアルづくりに取り組んでいますが、私たちが活動を始めた当時は自殺対策に関するマニュアルは何もなかったんですね。

自殺を考えてやってきた人に見せてやる本が何もなかった。それで、そういう人を元気にする励ましの言葉と出会えるような本がほしいということで、全国の人に励ましの言葉を募集したんです。81人の人が寄せてくれた。それが「ここに響く文集」です。それを読んでもらうことで、自殺が減ればいいなあということで、NPO法人を始めたんです。ですから、マニュアルづくりはものすごくいいなと思います。

東尋坊にみなさんが全国から集まってくるんですが、9割以上が県外の人ばかりなんですね。いっくら水際で対策をしたってあかんですよ。川上から流れてくるんですから。だから私はこの岩場から読み取れたことを全国の人に発信して、各地域でその対策をしてほしい、と言いたいです。自殺しようとしている人、悩んでいる人、そういう人の悩みに応えることが自殺防止対策の最たるものである、そういう人たちの声を聴かずして、自殺防止対策ってあるのっていうことをさかんに言っているんです。

学校の先生、政治家の先生の話聞いたかて、それだけでは自殺防止対策じゃない、と思います。今ここに自殺しに来た、その人が何を悩んでいるか、それに向っての対策が最たる自殺防止対策であってね、今日は行政の方もたくさん集まっておられるんで、そこらへんの対策についてひとつ考えていただきたいと思っています。

もうひとつ。今日はシェルターの人も見えています。いま障害者自立支援法とかが政治的に問題になっていますね。私は自殺企図者に対する自立支援センター、支援施設、それがなんでできないのかと思います。そういう施設を全国各都道府県に1か所はほしいんですね。行政は、すで

にそうした活動に取り組んでいるボランティア組織にその事業を委託してもらえたらなと思っています。いまはみなさんが好意で手弁当でやってくれているんですね。今年、100億円ですが、3年間で自殺防止に使いなさいとあって、国から基金が出されました。その基金を、再出発を支援しているシェルターに提供して、自殺企図者の自立支援センターにしていく。行政も含めて、社会全体でそういう流れを、そういう対策をしていけば、自殺はもっともっと減ると思っています。

もう一ついいですか。岩場に立っている人の気持ちはどんなかということを私はいつも考えているんですね。立っている時の気持ち。平成15年に21名の人が自殺で亡くなっているんですけども、そのなかの6名位の人が、観光客の見ている前で、どーんと飛び込んでしまったんですね。見ていた観光客から警察へ、いま目の前で飛び込みました、って110番通報があった。そのほかの人はどうなの？ あとの人もみんな片道切符で来ているんですね。それであの岩場をずっと迷走しているんですよ。飛び込みに来たんやけども飛び込めない。怖い、で、迷走して歩いているんですね、あっちこっち。そして、日没を待ってから、飛び込むんですよ。

その人たちの心境は、死んだらあかていう声を待ってるんです。死にたくないんですからその人たちは。青木ヶ原で120名の人を募集して、その声かけをしようというのは非常に大切なんですね。その声かけがないから飛び込んでしまっていた、ということなんですね。あそこの岩場に来たけども、最後の最後までラストチャンスを待っている、声かけを待っている。そういうことをね、みなさんに認識していただければと思います。これは東尋坊だけじゃない、みなさんの住んでいるその地域で死にたいって言うてる人もそういう気持ちなんです。その気持ちに沿っていければ自殺はなくなる、自殺することはなくなると、私はそう思っております。

佐藤修

ありがとうございます。今の話を聞いて、何か発言したい方はいませんか。あ、そうでしたね、Bさんが話したいと言っていたことがありましたね。さっき聞き出さなくてごめんなさい。Bさんはいま自立にむけて新しい体験をされている。それで今の話につながることをみんなに言いたいんですよね。お願いします。

Bさん

今年の3月から4月にかけて、自分はホームレスになりました。そこで、役所の人かどうかわからないのですが、紙を配ってまして、それをもらいました。そこに寮のことが書いてあった。それで、上野の市役所まで行きまして、その寮に入れました。お金は無料なんです。そのおかげで、今は勤められているんです。でもその寮はあと1か月位で出なくちゃいけないんです。

佐藤修

そういう場所がもっと増えたらいいですよ。

Bさん

いいのになと思う。

佐藤修

たまたまBさんはその紙をみた、それで入所できたんですよ。でも、誰でも入所できるわけではない。まだ数が限られているんですよ。

Bさん

はい。抽選です。だからそういう施設がもっと増えればいいのになと思いました。

佐藤修

それは何の制度ですか？

Bさん

路上生活をしている人たちの支援制度です。

佐藤修

そういう意味では自殺もホームレスの問題も孤独死の問題も、いろんな問題は全部つながっているんですね。だからそれぞれを個別に解決するのではなくて、一緒になって解決していく。いろんな意味でのシェルターとか支援とかそういう場所が、もっとどんどん増えてくることができれば、

Bさん

いいのに、と思いました。

佐藤修

せっかく行政が基金を作ってくれるんだったら、それに活かして、そうしたいいろんな人たちの自立を支援するシェルターをどんどん増やしていただきたいと思います。茂さん、そういう声をどんどんあげていかないといけませんね。

茂幸雄

はい。

佐藤修

ありがとうございました。Aさんも何かありますか？ いいですか？ AさんBさんのような人たちのこういう声っていうのはなかなか聞く機会がないと思うんですね、今日は報道の方もたくさんいらっしゃいますが、きちんと思いが伝わるような良い形で、AさんやBさん、そして藤田さんや佐藤洋司さんの話を、ぜひ世の中に伝えていただきたいと思います。

時間がきてしまいましたが、みなさん、言い残したことはないですか。

時間が窮屈で思うようなことが十分に話せなかったかと思いますが、時間になりましたのでこれで終わりたいと思います。最後にまとめをしようかなとも思ったんですが、むしろみなさんの生々しい言葉を大事にしたいと思いますので、まとめはやめさせていただきます。

休憩をはさんで後半は、会場のみなさんからいろんな意見を出していただきたいと思います。

長時間ありがとうございました。

(話し合い前半の部終了)

話し合い2：会場からの発言

佐藤修（進行役）

それでは引き続き、進行役を務めさせていただきます。檀上には先ほどのみなさんに加えて、ネットワーク事務局長の福山さんに参加していただきました。会場のみなさんからのご質問やご意見に、コメントなどお願いしたいと思います。

早速、話し合いのセッションに入りたいと思います。今日の前半のお話を聞いて、みなさんが感じたことや思ったこと、あるいはこんなことに取り組んだらいいのではないかとのご提案などをいただければと思っています。できるだけたくさんの方にご発言いただきたいので、原則としてお一人5分以内でお願いしたいと思います。

最初はなかなか話しづらいと思いますので、このネットワークづくりに協力してくださり、一緒に取り組んできたNPO法人自殺防止ネットワーク風の代表、篠原さんから口火を切ってもらいたいと思います。篠原さん、よろしく願いいたします。

篠原鋭一（NPO法人自殺防止ネットワーク風理事長）

今日は「自殺多発場所での活動サミット」というタイトルなんですけれども、このサミットの本質は自殺多発場所に行く前にどう止めるかということだと思います。そのところが今回の重要なテーマだろうと思います。そして、いたしかたなくそうした「現場」においてになった方々を、茂さんはじめみなさんが大変なご尽力を持って「ちょっと待って」と、声をかけてくださる……。

私は今から17年くらい前から自殺の問題と対峙してまいりました。最初のころは1年に数人ということでしたけれども、先日カウントしたら5千人を超えました。このところ報道されたこともあり、最近には月に70人位の方々が私のお寺を訪れます。電話は200人が本当に夜となく昼となく。明日も6組、組と申しましたのはお父さんお母さんであったり、それからご夫婦であったり様々ですが、いずれにしても、日本は大変な自殺大国になったわけです。

私は禅寺の住職をしておりますが、「多発場所」に行きたいという方がお寺へいらっしゃいます。先日も、一人の女性がへとへとになって私の寺に朝4時においてになりました。樹海で発見されて未遂で終わったんだそうです。で、これからどう生きていこうかということで、おいてになりました。とりあえず風呂にはいっていただき、食事をさしあげて、しばらく休みましょうよとすすめ、それから2日間ほど泊まっていただき話をじっくり聞きました。そういう活動をしておりまして、全国、大分県から北海道から青森から、夜行バスで浜松町まで来て、私のところへおいてになる。時間、体力そして経済的に大変なご負担になっているわけです。

日本にはコンビニの倍以上のお寺があります。そこで私がこの度立ち上げましたNPOは、そのお寺の住職たちに呼びかけをして、まず第一に各都道府県に2か所から5か所の相談窓口ならびにシェルターをつくらうということに致しました。先日、茂さんにも参加いただいたのですが、お陰さまで25ヶ寺が立ちあがりました。この25ヶ寺が近々同じ近隣のお寺に呼びかけまして、それぞれが2ヶ寺から3ヶ寺を増やす。来年度にはさらにその25ヶ寺それぞれが5ヶ寺から6ヶ寺くらいを増やして、都道府県にすぐに相談できるような窓口を立ち上げようという作戦でやっておるわけです。

とにかくそのお寺を訪ねていただければ心の中に渦巻いている苦悩、私は多重苦といっています。いくつもの苦悩が重なって最後のところで命を絶つというところへ追いこまれていく。その苦悩をひたすら私たちは聞き続けることがまず第一だと。そこで、「いかないで」と、この場所

に行かないでという物理的な意味での「行かないで」と、命を絶って旅立つという「逝かないで」、とこの2つのメッセージを届ける、そういう活動をこれから全国展開していきたいと準備しています。

最初に出発する寺院名は、近々テレビや新聞で報道されますのでみなさんの目にもとまると思っています。いずれにせよ私たちとしましては、特に私のほうは自殺志願者駆け込み寺という報道がなされたもので大変多くの方々が電話なり訪ねてくださるわけですけれども、日本が作ってしまったこの問題は、個人の問題ではないということをはっきりとお互いが認識する必要があると思います。連帯責任です。社会的構造から発生した様々な苦悩を背負った方々が、最終的に孤独ではなく孤立をしていくんですね、ここを一つのポイントとしてとらえていただきたいんです。

よく孤独からだとおっしゃるけれども孤独はまだ救いがあります。でも孤立ということになったら自他ともに人間関係が断絶してしまいます。根本的にここに注目しなくてはならない。今後、ネットワーク風が、お寺という空間があり、しかもそこには常日頃、対話経験を持っている住職がいて、対話のテクニックをそれなりに学んだ人たちがいますので、少しは「この場所(多発場所)」に行く前にちょっと待とうよというような、あなたの思いをぜんぶここで吐き出して、というふうな、そういうことは可能だろうと私は信じております。

最近、おかしな現象が起こりはじめました。カウンセラーという職業をお持ちの先生が、患者を同行されて私のところへおいでになるんです。私ではどうにもなりませんから住職さんをお願いしたい、これはどこかおかしいと思いませんか。でも心療内科の先生もカウンセラーの先生方も精神科の先生方も、かなり手一杯なんです。ですから先生方とこれからネットワークを作っていこうと思っているんです。医療関係者と我々の民間活動者が、医療的な問題は先生たちをお願いする。しかし、この方は誰かがじゅっくりと3時間でも4時間でも、また2回3回4回と繰り返して話を聞いてくれる人がいたなら、この人の苦悩は半分解決することはわかっていますと、先生たちがおっしゃるんですから、私はそれを信じてやっているわけです。こうしてそれぞれが活動をしているみなさんのネットワークによって、この大問題を解決できればと思っています。

自殺のない社会づくりという、これは異論のない戦略ですね。後は、この戦略をどういう戦術で解決していくのかということです。先ほどBさんでしたか、これからお住まいが必要だといわれましたが、すぐに紹介いたします。ただし群馬県ですよ。というふうにネットを持っていると具体的な活動が出来る。

我々はお互いに現場主義者になりたいと思っています。理論も大切です。シンポジウム、それから資料を作ることも重要なことですが、現場の本当の苦しみ、それを体験的に如実に見つめて、そこから戦術を組み立てていくような、共同作業をやっていく。そういう風に私は思いながら、また明日も多くの方々と対話いたします。

ありがとうございました。

佐藤修

まさにおっしゃる通り、現場がゆるやかにつながっていけばいいなと思います。他にもいろいろ活動されていらっしゃる方がいると思いますが、自由に発言をしていただければと思います。

佐藤(NHKプロデューサー)

NHKの「日本のこれから」という番組のプロデューサーをしております佐藤と申します。今度12月4日に、様々な人を集めて、いろいろな問題点を話し合っただけで自殺を防ぎたいと考えております。

今日お聞きしておかしいなと思ったのは、茂さんが最初おっしゃっていた「たらい回し」ですね。自治体の窓口から500円渡されて、次行って、次行ってって、派遣村名古屋のときの派遣切りのときにも本当にそういうことが起きて、それでどンドンどンドン名古屋に行ってって本当にひどい話だなと思ったんです。

私がふと思ったのは、ここに政府の方がいらっしやらないのであれですけど、一人自殺の企図者を救ったら、国庫からお金が出るとか、各自治体がそれぞれ負担するとかだと大変だなと思ったんですね。茂さんのおっしゃった企図者の自立支援センターというのは本当に良いアイデアだなと僕は思ったんですけど、自治体のたらい回しを防ぐには、たぶん自治体の方は「予算が…」が頭にあるので、そこをなんとかしないといけないと思いましたけど、ご意見お聞きしたいと思います。

茂幸雄

まさしく言われたとおり、各自治体の予算というのがあるわけですね。窓口で生活保護の相談を受けている方は、相手から本当に公務執行妨害で逮捕された人もいるんですけど、福祉課の人も大変な目にあっています。もう命がけで対応しています。相手の話を聴いてなんとかしてあげたいけど出来ないんですね、天の声が下っているから。

天の声ってなに？ということなんです。いわゆる国民の命が、その地域の財政と天秤にかけられている。財政難だからこの人は助けよう、この人は切り捨てよう、これが実態です。

私も何人も同行して窓口をお願いに行きました。最近ようやくちょっと私の名も売れたと申しましょうか、やっと相手の弱みが分かってきたと申しましょうか、現地保護というのがありまして、現在そこにいる人は、その自治体が保護を決定し実施しなければならないということが、生活保護法19条に、地方自治体の義務となっているんですね。なおかつ支援の仕方1か月を単位として現金で前渡ししなければならない。500円渡せばいいなんて全く書いていません。あの金は何？ということなんです。隣の役場まで行く汽車賃を払っている。もし福井とすれば、あなた東京の人でしょ、東京に行って生活保護を取りなさいと言われ、突き放しているのです。

一番大変なのは、生活保護の窓口を担当している方たちの苦勞を、「天の声」と言われる立場の人が窓口業務をしている人の責任にすること自体が間違っていると思います。

窓口、現場は非常に苦勞しています。なんとかしてあげたいというそういう人ばかりなんです。ところが、言われたようにお金については国から100%回せば、全部助かるんですよ。25%地方自治体の責任になってるんですね。自分の地域の住民しか手当てしたくない。自分の県の間も十分でないのに他県の者は何だ、とはっきり言われている人たちが何人もいますよ。その不適切な対応をされて突き放されている人たちの声を担当行政に届けて適切な対応を再考してもらおう。だからもう少し頑張れよ、再出発しろよとそれだけ言うのではなく、その人たちの声を行政担当者につなぐ、こんな活動も大きな自殺防止活動であり、これが大切だと思っています。

佐藤修

現場からそういう声をどンドン出していかないといけないですね。

杉本（大学生）

東京で大学生をしている杉本と申します。みなさん、自立ということを強調されていましたが、自立ということは必須だと思うんですけど、金銭的問題とか経済苦が根本原因なのかという

ことにちょっと疑問があるんですね、そのような問題を解決すれば自殺者は激減するのか。1998年3月、自殺者の急増をみなさんは何だと認識しているのか、それが多発場所での危機介入にどういうふうに関与しているのかについてお聞きしたいんですけど。

藤藪庸一

自立ということなんですけれども、僕も出来れば経済的な、自分の家を持って、自分の部屋、生活の場を持って、一人で頑張っている、そういう状況を自立と考えたいという気持ちがありました。でもいろんな方と関わってきて、いま僕自身が考えている自立というのはこんなことです。理想に聞こえたらごめんなさい。この社会の中で、生きがいを感じて、居場所があると感じていて、誰かとの関わり、コミュニケーションがちゃんととれていて、お金は入ってこないけれども、誰かに感謝されることがあったり、自分も誰かにありがとうという気持ちがあったりする、そういう状況で生きている人が、社会的には自立しているとは見てもらえないんですけども、人としてはもしかしたらそういう生き方もありなのかなと僕自身は感じています。

うちの共同生活を7年つづけている男性がいます。その男性は今でも経済的に自立ができません。仕事に行っても、もらえる給料が少ないんです。でも彼の口から人の悪口を聞いたことがないし、近所では本当に頼りにされるおじさんになっていて、仕事のない時には必ず誰かの家の草刈りにでかけています。またそういうお願いがなくても、どこかの掃除にでかけています。その地域のなかではすごく受け入れられていて本人もそれにやりがいを感じているんです。全然社会的には自立とは言えないんですけど、でも彼自身の人生はものすごく変わりました。それがすごく僕にはひとつの目安になっていて、それもありませんか、それを含んで生き心地の良い社会になるのではないのかなと今は考えています。

それからもうひとつは、98年自殺が急増したことについて、それをどう考えているか、ですか。

杉本

その理由と申しますか、特に日本で自殺者が急増して...

藤藪庸一

私は、今も今年に入って急増していると思います。この現場に来させないようにと先ほどお話がありましたが、来ている人は増えています。その現状を見ていると、そのほとんどが仕事がない、家がない、そして生活できていかないという問題を抱えている人です。3月からうちも保護する数が増えていて、いま去年の倍を超える勢いなんですね。その状況を見てみると、98年、97年のあたりの社会状況もよく似ていると思います。そして職にあふれた人、就職できなかった人、そうしたところで希望を見出せなかった人、また絶望をした人が自殺へと向かったということは否めないんじゃないかなと思います。今も昨年末からそういう状況に陥っている人が、増えていると思います。

佐藤修

ちなみに杉本さんご自身はどう考えますか。

杉本

自殺者が急増した原因なんですけど、これは、生きる意味というか、僕自身が昔から悩んでき

たことなんですけれども、人とのつながりの希薄化とか、ある意味では無化といってもいいような状態のなかで生き抜くための生命力の枯渇というか、そういうものが、この社会構造のなかにしみわたっていること、それによって経済苦、不景気など一種のストレスに対する耐性がなくなったこと、何らかの事情で欠けていたことが、おそらく98年に自殺者が急増した原因だとは思っているんですけれど。

佐藤修

そのあたりはどうですか、福山さん。

福山なおみ

確かに98年、その前年が大きく影響するんですが、山一証券の倒産であったり、今回はアメリカの金融危機ということがあったり、経済問題というのは大きいと思います。

でも本当に人は経済の問題だけで死ぬだろうかというのは疑問ですね。そのときに本当にささやかな支えがあれば、やはり人は頑張ってみようと思えたりする。

この問題について語る時に重要なことは、うつ病という病気の問題が出てきたときは、すこしその話とは違うのかもしれないですけど、病的な状況を治療することと同時に、ではそれだけで治ったかということそうではないんですね。うつ病の人が実際本当に治療していたからそこから生きたかということではなく、ライフリンクの調査にあるように、死ぬ2週間前にも受診に行ってるんですよ。さきほど篠原さんがおっしゃってたんですけど、行ってるんですよ。

杉本

はい、こないだのライフリンクの集会でも、大体、自殺企図者、既遂者の7割方が何らかの相談に行っていたという。

福山なおみ

ええ、だからその未遂者の既遂率が高いということで冒頭でお話ししましたけれど、水際で救ってからそのあとの支援が非常に不足しているというのがあることと、企業でも成果主義が非常に重視されて、人というのが見えなくなっていますよね。成果主義、能力主義、そこだけ評価されて人が評価されない。ですから過重労働だとか、いろんな症状から自殺に追い込まれてしまっているという現状が、これまでの調査でも明らかになってきていると思うんです。

さっき言われましたように、本当に隣の人に声をかけるであったりとか、小社会のなかで職場なり、自分がこの仕事をすると、良くできたねってちょっとひとつ褒められたりだとか、やってもらったことで私も助かるよとか、お互いにそういったケアは一方通行でなくて、そんなことができていくと随分違うのかなと私は思っています。

それから教育、研究、生きる教育とかいう話がでたんですけれども、一方的にするのではなくて私自身がそうであるかどうかというのが問われる社会ではないかなと思います。私たちが心地よくないのに君たちだけ、子供たちだけこうすべきだ、という教育をしても私は全然心に響きません。先ほど来、茂さんの活動とか藤藪さんの活動とか、マスコミを通して見て、心が揺さぶられたとか、心に響いたとか、黙っていられなくなったとか感銘を受けたことで、行動に移しているじゃないですか。だからそういうようなことで、感動する気持ち、思いを大事にできるような教育であったり、社会であったりそういう場がもっともたれるべきかなと思っています。

茂幸雄

自立とは何か。私は幸せとは何かということだと思います。お金を沢山もっていればそれだけで幸せか。幸せとは何かという原点にたてば、自立とはなにかというのが出てくるんじゃないでしょうか。

私の思う幸せとは何か。好きな人と、お父さんお母さんでもいいですよ、好きな人と一緒に生活が出来る、それから自分が誇れる仕事に就ける、地域の人から認められている、地域の人から自分の存在を認められている、それがあれば幸せに生きられると思う。お金儲けばかりしていると、だんだん心がさびてくると思う。食べるだけあればいいんだよ、という気持ち、それが精神的な自立になるのかな。幸せとは何かという原点が欠けているのかな、とっております。

佐藤修

そういうような問題から考え直していかないと、多分前に進まないだろうということなんですよ。

杉本

前半の討論においては、自立ということを経済的な自立と重ね合わせて見てしまっていたんですけど、そういう話がうかがえて良かったです。

佐藤修

ここにいらっしゃるみなさん方も、むしろ基本的に杉本さんが考えているような形で自立とかを考えていると思います。

中村博行（NPO法人土と風の舎）

埼玉県でNPO法人をやっている者で、立場上は市議会議員をやっています。自殺問題に関しては、私は3つの対比するキーワードで考えさせていただきました。まずひとつは交通事故と自殺、ふたつ目は個人的問題と社会的問題、そして行政とNPOと考えてみたいと思いました。

交通事故と自殺ですけれども、交通事故は社会問題化したのが今は本当に地域での問題として降りてくる。マスコミ報道、法律の改善される中で6000人を切った状態になっている。一方で自殺というのは平成10年から来年含むと12年3万人を超えている。ゆゆしきことだと思えます。交通事故というのは翌日にはどこでどういう事故が起こったかというのはすぐわかりますけれども、自殺に関しては、次の日にはわからない。やっと今年になってひと月ごとに統計が出るようになって、私の住む埼玉県では今ワーストワンの伸び率、伸び率一番高いです。この問題に関してはもっともっとマスコミはもちろん、私たちが地域の問題として知ることだと思います。私の住んでいる行田では16年から18年にかけて、毎年25人位、3年間で75人くらいの方が亡くなっています。ちなみに交通事故死は3から5人、それぐらい、地域では大変な問題なのだということを地域の人知らないですし、私どももそういうことを言っていかなきゃいけないと思います。

それから個人と社会。自殺する人は極めて特異な人だと、病気になってうつ病で自殺するんだと個人的に片付けられていたと思います。ところが健康問題もあり離婚問題もあり借金問題あり、子供の問題あり、いわゆる多重理由があって、いろんな経路があって、本当は死にたくないんですよ、いろんな理由経路があって、それでいよいよ自分の命を絶つ、極めて個人的な問題ではなく社会的な問題なのだという認識が私たち一人ひとりが交通事故と同じようにとらえなくて

はならない。

最後に行政とNPOですけど、NHKの今日の視点という番組で秋田県が自殺ナンバーワンをどうして返上したかというのをやっていました。わずか15分ですが。平成14年トップでしたが、県が各市町村の首長を呼んで、どうしてこうなっているんだというのを何回もやって5年目にして本当にそれが実ったと。これは私は首長の問題、それを地域の人達がどれだけ受け止められるかという秋田県のモデルに学ぶところが多いんじゃないかということで、まさに最後はそれに呼応して地域の支え合い、自分たちの地域の問題なんだという、あなたのできることはなんですかということをおも地域で考えていきたいと思います。

佐藤修

中村さん、ではぜひ行田市ではじめましょう。やれることいっぱいありますよね。

中野園子（編集者）

中野と申します。編集者です。ここ数年このテーマにすこし関わりました、個人的に思っている具体的な提案を言ってもいいですか。素人ですからずれているかもしれません。

派遣村の湯浅さんが政府の戦略局に入って、年末に向けての自殺対策とか生活保護、情報と相談をハローワークというところ1点に絞ると。今まで訪ねるところが多すぎて、徒労が多すぎた。それが画期的なことができるご時世になったので、自殺対策のNPOも関わり始めているようなのですぐ実現するかとは思いますが、例えば自殺の相談情報とかをハローワークに派遣と一緒に全国に集約されれば相当画期的なことだと思う、そんなこともできるよと個人的には思います。

私はメディアの片足なんですけれども、思うのは、随分ドキュメントの茂さんとか感銘を受けるし、訪ねて救われるというのはあるんですけど、関わり、声かけが大切だというのは重々わかりますが、一般の人はやはり現実的になかなか難しい。メディアの感動的な話もやはりほとんどはかわいそう、ちょっと語弊があるかもしれませんが、それで終わってしまいがち、そこから一歩踏み出すのがいかに難しいかということをお非常に感じるのですね。

そして精神科医の、心ある先生とも話したんですが、自殺寸前のかんりの比率でうつっぽくなっている。それでその先生が言うには、その職場、あるいは家で、声かけられる状況というか、分からないときはしょうがないですけど、少々うつっぽいか悩んでみたいとか、そういう方たちに向かって、精神科医のほうでもキャンペーン風に、そういう方たちに声かけようみたいなキャンペーンがやれたらというようなことを、精神科医で言っている人もいます。

もう話が出ましたけど、ライフリンクの情報だと、7割の人が相談窓口か精神クリニックに行っているということですが、精神科医のほうだと、それ以上は関わりたくないから、どういう原因でそうになっていますかと親身にきいてくれる先生がどのくらいいるか疑問ですよ。少なくともクリニックのロビーに自殺対策の相談窓口の冊子であるとか、多重債務、行政の窓口の冊子であるとか、そういうものを津々浦々までおけるような状況、精神科医の連合の大きなところに働きかけて、そういう風な動向が、生まれればと思います。

いわゆる自殺対策基本法とがん対策基本法が山本孝史さん他のご尽力で出たわけですけども、あそこは年に1回2000人のがん患者が、がん患者大集合という大会をして、そこに厚労省の役人も呼んで、1か所に情報センターが必要だとか、抗がん剤が遅れすぎているというような現実的な提案をしまして、情報センターというのが、がんセンターのなかにできました。まだホームページですけどね。さらに全国的な一本の電話相談窓口が出来たらいいという要求も引き続きあります。

そういうようなわかりやすい国民への情報を、今の政権だと必ずしも不可能ではなくなったと思うので、市民ネットワークを広げて具体的な声をあげるべき時じゃないかなと個人的に思っています。

茂幸雄

いま言われたクリニックの冊子の件ですね、現実にあった話。東尋坊に自殺しにきた人がどこか相談するところないですか、と104番に電話した。ところが、案内として、正式な名前を言わないと案内できないと言われて却下されてしまうんですね。人の命に関することなんです。自殺に関する情報は正式な名称なんていらないうちなんです。やはりそこらのことに対してもPRして、104番に自殺の相談所の番号を教えてくださいとさえどこでもいい、教えてもらえる。こういうようなことも必要ではないかと思えます。

先ほど交通事故の話出ましたね。半減以下になったというのは、どんな対策したか。法律もちゃんと整備できて、いわゆる民間パワー、交通安全協会とか安全指導員とか、いろんな民間パワーを吸い上げたからあれだけ半減したんですよ。今自殺防止についてどれだけの民間の人が携わっているか。これが一番大きな違いなんだと私は思う。自殺防止は特別な作業と思っているから、何もできないんです。

うつ病の話も出ましたね。うつ病イコール自殺なんてね、精神科に行きなさいというようなことになっていると思うんですけども、うつ病って病気なんです。風邪の場合どうします？風邪ひかないように予防するでしょ、私は自殺防止対策はうつ病にならない対策、「自殺防止対策はうつ病ですよ、精神科に行きなさい、クリニックに行きなさい」は私ちょっと違うと思う。うつ病にならない対策をしなければ本当の自殺対策ではないと思うんですね。

例えば、パワーハラスメントね。地位を利用して部下に強制して、うつ病にしてしまう人いますよね。あるものすごく出来る課長がいるんですね、社内ではすごく重宝がられている。ところがその人の下で働いている人がみんなうつ病になってしまうんですね。おそらくみなさんのまわりにもそんなことが職場にあると思うんです。その課長は何者だ。自分の大事な大事な職員を病気にしてしまっている。うつ病に罹ったら労災であり、場合により傷害罪にもなるんですよ。場合によっては、そういう社会に対して、そういう企業の職場内にあっても誰も職場の人は言えないという。そういうところの社会的な構造的な死に追いやっていると状況を問題にしていく、それも大きな自殺防止対策のひとつです。ちょっとおかしいよと言ってあげなければ、皆さんの命が絶ってしまうのではないの、踏切に立ってしまうのではないかな、という気がします。

藤敷庸一

中野さんの発言にあった、ハローワークにいろいろな機関がはいって窓口をまとめていくという今度の試みについては僕は賛成で、ぜひやっていただきたいと思っているのですが、同時に僕自身がすごく危惧していることは、うちや東尋坊に来る場合、いろんなところに多分相談には行ってるんですね。相談には行くんですよ。いくら窓口がひとつになっても、そこで結局どう回答をもらうか、そこでどういうふうに対処してくれるのか、そこがすごく問題です。うちに来た方の例ですが、弁護士のところに相談に行ったのに、あなたは生活保護しかないよと言われた。でも借金はあるし、いろんな問題があって生活保護の適用外になるような人にそういうことを言ってしまう。その人はもう生活保護しかないとお墨付きをもらったように帰ってくる。それって、相談に行っているけど回答をもらえていないんですね。

表面的な制度とか形はすごく大事だと思うのでそれは賛成します。でも実際本当に必要なのは、

そこでどういう答えをもらえるのか、または対処がなされるのか、そこまで本当にやる気があってそこに行くってくれるのか、その辺まで絶対問題は大きな面倒臭い話ですけども、実はそこまで考えないと、それに参加して下さる方の意識を変えていただかないと、難しいんじゃないかと正直思うんです。

佐藤修

ありがとうございます。冒頭に茂さんの話があったと思うんですけども、制度的な法整備が整い、ワンストップサービスもできようとしている。でもそういう法整備以外の面で、どんなに頑張ってもなかなか問題が解決しないという現実もあるわけですよ。それでやっぱり今までの取り組みの延長ではない違う取り組みが必要ではないかなというのが今回のネットワークをつくりだした理由の一つです。それも篠原さんがおっしゃったように、現場の人が中心になって、ここにいらっしゃる当事者の方も含めて考えようというのがこのネットワークの大きな趣旨なんです。

それで中野さんに質問なんですけれども、なぜ声をかけにくいのでしょうか。

中野

そこがね、一番自分自身も含めて難しいところだと思っています。テレビのドキュメントで見て、感動し、かわいそうとも思っている、派遣切りされた、すこし汚れた知らない方いきなり、声かけ、関わり、それをするのは難しい。茂さんは喜びだとおっしゃったけど、するべきだとおっしゃったけど、いろんな方いるからわからないですけど、多くの人の場合、家の中の家人とかね、職場の仲間ですこしへこんでいるなという人だったらやれるけど、怖さも混じって、見ず知らずの人に、明らかにそういう人に、見ず知らずの人に声かけられる人は果たして何割いるか。残念ながらあまり多くいるとは思いません。

佐藤修

少ないでしょうね。でもそこで終わると今までと一緒になので、だから声をかけられる人から声をかけよう、というのが今回の呼びかけなんです。だから声をかけにくいと思わないでほしいんです。報道の人たちも、特別な物語をつくりだすのではなくて、もっとみんなの隣にある話ということをやっていただきたいというのが私たちの思いなんです。

中野

さきほどあったうつっぽい人への声かけキャンペーンと似たようなもので、うつっぽい人でなく、声かけキャンペーンのようなものが多くの人に参加できる雰囲気のアイディアがうまくできたらいいなと思います。

佐藤修

できたらいいですね。中野さん、ぜひやりましょう。

福山なおみ

その声かけのことなんですけど、先ほど時間の関係で東尋坊の集いのことには十分に触れられなかったのですが、その時のとてもいい体験があるんです。16名の方が参加したんですけども、たとえば報道の方も寝泊りを一緒にしました。夜の自由時間に、カラオケをしたり酒を飲んだり、

いろんな自由な時間を使って、報道の人がだれかどうかもわからないくらいに、みんなおんなじ人と人。そういった心の垣根をとっばらってですね、立場を超えて、同じ人という、心の水平な関係、この状況が私自身も快かったんですね。いろんなものも食べたり飲んだりぐっちゃぐちゃになった人もいて、ではお疲れでしょうからお休みくださいと言ったら、とんでもない、一緒に片づけましょう、と言って台所に行って、その人たちが洗い物をしてくれて、あ、すごい几帳面なんですね、と言っていると、いやいやこんなことはもう、と嬉しそうにやってくさってですね、そういう当たり前なつきあいが大切なんだろうと思います。

声かけで、声かけましょうとか、キャンペーンですっていうことは私はあまり望みたくないですね、普段のこういうふうにいるなかで、どうしたの、今日ちょっと顔色悪いんじゃない、でも今日元気良くなったね、昨日出会った時よりも、今日帰る時良かったねって言って、私たちは最後バスで分かれていくんですね。一期一会かもしれないですけど、私はその「出会い」というものが、とっても嬉しかったんですね。ですからそういうものを越えた、人と人とのつながりをもう一度、築き直しませんかという気が私はしています。

茂幸雄

その時の集いの時は、先生も来てくれましたし、病院の先生も来てくれましたね。体験者が言っていた言葉があります。病院行っていたけれど、いつも精神科医の先生を冷めた目で見ていた。何故かという、自殺の経験も、考えたこともない人にいくら話したってあかんよという、最初からそういう目線で相手を、医者に行っていましたよというんです。でも、その先生方と一緒にカラオケやったりしたんだけれども、何か近くに感じた。経験していなくても、一緒なレベルで一緒に体験をすることによって、今までの目線が変化して相手の先生のいうことがすぽっと心に入っていたんですね。そういうことをその人が言っていました。そこいらの対応のしかた、集いがとても良かったなど。

佐藤修

そうですね。多分私たちの日頃の生き方が変わってきているという問題がどこかにあるんでしょうね。そこを考え直そうと言うことなのかもしれません。他、いかがですか。

江川（上越対話法研究会）

スタッフという名札をぶらさげていますけれども、名前だけで、本日スタッフにならせていただいたような江川なんですけれども、新潟県上越市に住んでいます。

私はこの自殺多発場所での活動者サミット、このメーリングリストにも参加させていただいておりますけれども、最初はドキッとしました。「自殺多発場所」。茂さんの活動をテレビで見ている、すごく度胸のあるというか勇気のある方がいらっしゃるんだなあという感想をもっておりまして、本当のところは他人事でした。でも仲間入りして、自分の出来ることを無理しないで自分の身の丈でできることをやればいいのかなあという気持ちにならせていただきました。

そしてこのサミット開催にあたって、事務局があちこちの報道機関、新聞社に情報を流していらっしゃる姿を見て、私は実は、上越対話法研究会といいましてコミュニケーションスキルの習得をする練習会をやっているものなんですけれども、その会が7年間、地元の新聞2社、上越タイムスさん、上越読売さん、それから上越有線放送電話協会、そこで色々応援してくれるわけです。情報として流してくれたり、記事にしてくれたり参加を呼びかけてくれたり、そういうネットワークを既に持っていましたので、この活動者サミットが東京であるのですよ、となんとかPR

してくださいと車で回ってお願いしました。すると、どこも好意的に記事にしますよ、ところで江川さん何をやるんですか、と言ってくれたんですね、そのことで奮起することができました。

実は話を聞くということを個人的に、自宅でやりたいなあと何年も前からあたためていたんですけれども、今お話がありましたように、怖くてですね、なかなか狼煙をあげることができなかつたんですけれども、サミットのPRをすることで新聞社各社を回り、江川さん何をするの、するんだったらPRするよと言ってくれたおかげで、じゃあ私は聞くことを基盤に据えて、人との付き合いをやってみようという気持ちにならせていただきました。

本当にこのネットワークのおかげだと思っただけですが、後押しをしていただいたような感じで、さっそくPRしていただきましたら、明日、一人の方が我が家においでになるということが実現しそうです。こういう広告を探していたんですという連絡をいただいて、自分が勇気をだして一歩前に進んでみたことが、こんなにも一人の方が歩み寄ってくださるといふその喜びにいま浸っているところです。喜びが変わっています。

カウンセリングも少し学んでいますけれども、カウンセリングというと上越市も風土的に、「え、私そんな病気じゃないわよ」と抵抗、敷居があるわけです。今までこう動いてきますと。ですから呼びかけは「胸に秘めた思いを時間をかけてゆっくり話してみませんか」、そういう呼びかけの記事でPRしていただいています。「連絡ください」というタイトルで江川さんの家の電話番号を載せています。そういう方が増えてこれたら、もう少しまた違った仲間として別の会場でしゃべり場みたいなところに広げていけたらいいなと夢を持っています。

伊藤（新鹿角新聞社）

秋田県の小さな町、小坂町というところで地域の豆新聞社を40年余りやっています。自分で話すつもりがなかったんですけど、さっき秋田県の話が出ましたので、数字はそうかもしれないけれども、実態が違うので少し話をさせてもらおうと思います。

ご承知のように秋田県は十数年自殺者数日本一ということで非常に話題になりましたけれども、秋田県のなかで私の住んでいる小坂町という人口6000人の町と、約4万人のとなりの市が警察署が一緒になっているんですが、その鹿角という地域が、秋田県のなかで自殺率が一番高いんです。年に22人から26人くらいが自殺と変死、つまり自殺だかどちらかわからないというデータが出されています。

さきほど首長さんたちが一生懸命やれば自殺が減ったというお話があったんですけども、これには隠された意味がありまして、自殺の中で、公務員、学校の先生、市役所の職員、市町村の職員、準ずる福祉とか衛生組合、こういう方の自殺が非常に多いんです。私は4分の1くらいが公務員だと思っています。それで一般のことよりも公務員の自分たちの職場のことをなんとかしなくちゃならないということで、役所が対策に取り組み出して、最近それが減ってきました。だいたい私のとなりの市では1年に2人くらい、私の町では2年か3年に1人くらいだったのが、このところ公務員の自殺はありませんでした。しかし、今月に入ってからまた3件も出ています。

それから、秋田県が自殺が多いというのもさっきでましたけれど、観光地だということが関係しています。私の町には十和田湖があり、近くに八幡平があります。十和田湖の反対側の青森県で入水自殺がありますと、風の関係で、私の町のほうにあがるわけですね。そうすると私の町で起きたことにカウントされます。身元がわからない人が多いのですが、その場合、お葬式は町がお金をだしてやらなくちゃいけないと法律で決められています。後で東京とか関西の方だったということがわかって、データの上では現地のところでカウントされるのです。

それから八幡平に来て、実際は自殺なのかそれとも山菜取りに来て迷ってしまったのかわからないような人も、一緒にカウントされます。これも最近では非常に問題にされています。

もうひとつは、これはみなさんの地区も同じだと思いますけれども、景気が悪くなってきますと、経営者が、従業員の首を切ること出来ないと思っているうちに、自分の財産全部使ってもどうにもならなくなって、他県に行って自殺する人が非常に多いんです。あとになれば、ああ、あれがシグナルだなと思うことがありますけれども、そういう人は困った話はしないし、顔も笑っているのです、みんな気づかないのです。こないだあった人は、奥さんにここにいますって言って、奥さんがそこに行ったら首吊って死んでいた、そしてあとは保健金で整理してください、ということだったそうです。

秋田県は自殺が多いという中には、このようにいろいろなものがあります。秋田県だけで考えても解決できない。過去のいろいろなこと分析していかないと、やはりなかなか自殺を少なくすることはできないんじゃないかなと感じています。

佐藤修

ありがとうございます。現地から情報発信をどんどんしていかないと見えない実態もありますね。

参加者

座ったままで失礼します。私はDVの被害者でうつ病患者で、いま生活保護を受給しながら暮らしている当事者です。名前も伏せさせていただきたいのですが、今までのお話を聞いて、感じることはいろいろあります。生活保護の受給者側からすると「水際作戦」というのは非常に嫌な作戦で、「絶対に生活保護にさせないぞ」という時に使われる作戦なんですけれど、ああこういう場面で使うこともあるんだなというふうに思いながらお聞きしていました。

生活保護はご存じのように非常にハードルが高くてなかなか突破することが出来ないし、突破するまでには様々な嫌な思いを通過せねばなりません。それに伴い生活保護の受給開始をされたらされたで、例えば仕事をしないで金をもらって暮らしているとかそういう偏見がすごく根強くあって、たとえば子供の学校の行事であるとかそういう場合に自分がうつ病であるということが言えなかったり、生活保護の家庭だから例えばそういう打ち上げとか宴会だとかにはなかなか参加出来ないんだということが言えなかったりという暮らしにくさと言いますか、そういうことが多々あります。DVの被害についても女性同士のあいだでもあなたがしっかりしていないからそうなる、という見方もありますし、うつ病だと言え、あなたが弱いからだと言われ、生活保護だと言え、怠けていると言われるという、本当にそこを当事者の側から壁を打ち破ってフランクにすることが出来にくい環境にあって、そこが先ほどから出ている暮らしの中の孤立につながっているというふうにすごく思っています。

母子の場合にはなかなか助けを求めにくくなりますから、思いつめれば自殺じゃなくて心の中になっちゃったりだとか、そういうことにも繋がりますし、本当に助けてほしいときは、なかなか助けてと言えない。助けてくれる場所に連絡が出来るときには半分は回復しているとよく言えますけれども、先日私が具合が悪くなった時も、ケースワーカーに電話をしたら、歩いて15分もかからないところに住んでいるんですけども、歩けないんだったら救急車呼べば、というふうに言い放たれて、駆けつけてはくれないんですね。そういう助けてくれるはずのところから、助けてもらえないというのが何重にも私たちの傷になっていくし、辛さになっていくということがあって、自分がもどかしいと思いながらなかなか回復できません。

こういう状態でしょっちゅう休んだり、子供が熱を出したりしても、ここで働いていいですよという職場があるわけでもなくて、何の光も見えない中で、しっかりしろと言われ続けるというところのしんどさも、すこし見ていただけたらなという思いと、私自身は、自分のそういう体験を踏まえて、私ももちろん死にたい気持ちになっていたことは幾度となくありますけれども、私のような人間でも、予防のために、自分自身の予防のためにという意味も含めて、何か出来ることがあればと思って、今日は参加させていただきました。

いろいろと追いこまれていくような、精神的なマイナスの感情がなくなっていく連鎖というか、そうしたことを超えられていくようなネットワークに、この会がなっていたら嬉しいと思います。以上です。(会場拍手)

佐藤修

そうですね、そういう方向にネットワークをもっていきたいですね。ありがとうございました。

藤野(横須賀市市議会議員)

座ったままで失礼します。福山先生、茂さん、ご無沙汰しています。神奈川県横須賀市で市議会議員をしております藤野英明と申します。地域の自殺対策を推進する地方議員有志の会を全国の地方議員で作っております。ライフリンクと一緒に、自殺対策基本法案が成立するのを促進するために立ちあげを行いました。自民党も民主党も社民党も関係なく党派を超えて集まっています。

是非ご紹介したかったので、報告させていただきますと、毎年4回以上はがりがりとかかなり真剣に勉強会を行っております。また視察も行っておりまして、来月には藤藪さんの白浜に行き一緒にパトロールをさせていただいたり、泊まらせていただいたりします。また、お互いの成果をどんどん共有しておりまして、神奈川県平塚市議会の議員もメンバーにいますが、初の自殺対策基本条例を議員立法して作ったりしました。

みな様にお願いしたいことというのは、今日は民間のみなさまの集まりですけれども、政治家をぜひ使っていただきたいということなんです。自殺問題に強い政治家をつくってほしいと。自分自身のまちに引き寄せて言えば、僕自身は、自殺対策をやりたくて政治家になって6年半になるんですが、前の市長も指針表明の中で自殺を減らすという言葉を入れたり、今回の市長選挙はちょっとだけテレビで取り上げられ、小泉元首相が応援した反対側の候補が当選したということで有名にもなったんですが、その市長選挙のマニフェストにも自殺を減らすことを入れ込みました。必ず自分のまちで亡くなる方というのはおられますし、一人なくなればその背後には5名のご遺族の方が少なくともいらっしゃいますし、未遂の方は10名以上いらっしゃるというふうに言われていますから、こういう状況というのはきちんと説明していけば、政治家の身内にも必ず関係者というのはいると思います。

具体的に政治家はどんなことが出来るかということ自分の活動に引き寄せて言わせていただきますと、例えばのちの電話というのがありますが、残念ながらなかなかつながらないので自分のまちで、こころの電話という相談電話を立ち上げたり、あるいは自殺対策連絡協議会、茂さんも福井で入っていただいていますけれども、そういうネットワーク組織も立ち上げました。また医師会の協力も得られて、精神科のドクター、数が非常に少ないので、一般のかかりつけ医の方との連携というのでも始めております。初めて遺族の分かち合いの会を立ち上げたり、多重債務の方々が弁護士の方に直接相談を受けることができる特別相談会を作ったり、なかなか知られ

ていないんですが、性的マイノリティーの子供たちの自殺企図も非常に多いので、教育長に直接会っていただいて、学校の中での性的マイノリティーの方々の人権を守ってもらう。あと中小企業の方々のサポート、アルコール依存症の方々のサポート、未遂の方々の再発防止のための救急、警察との協力といういろいろな形で力を入れています。

僕が議員になった当初というのは、35万円くらいしか自殺対策推進事業というのは予算がつかなかったんですけども、今ではわずかではあるんですが300万円位はつくようになって、本気を出せば政治家はやれることいっぱいあるんです。自殺対策というのは10年くらい経たないと成果は出せないんですけども、この6年半やってきて、全国レベルで見れば今年も12年連続で3万人を超えてしまう状況とは思いますが、自殺現況が見れるような状況になってきたので、毎月追っているんですが、横須賀市は前年同月比が初めて今年下がってきていると、これだけ今増えている状況の中で、横須賀市は下がってきているというのは、6年半曲がりなりにもやってきた成果なのかなという風に思っています。

最初はたった一人っきりで街頭に立って自殺のことを話していると、もう何なんだと言われることが多かったんですが、今ではその街頭でも相談してくれる方が増えてきました。協働という意味ではさっき市議の方もお話していただいたんですが、行政と同時に政治もぜひ使っていただきたいということを民間のみなさんにぜひお願いしたいなと思っています。

佐藤修

ありがとうございます。政治家が出来ることたくさんありますよね。でも私たちが出来ることもたくさんあるんですよね。それをぜひ一緒になってやりたいと思います。まだいろいろあるかと思うのですが時間が来てしまいました。

最後に、みなさん方から感想とまとめを少しいただこうと思います。日原さんからお願いできますか。

日原和美

今回は私どものまち、青木ヶ原の対策活動を紹介させていただきましたが、後半は会場のみなさんからとっても大切なお話が聞けたというふうに感じています。ここで得たものを町に持ち帰りまして、行政として今後どのようにみな様方とネットワークとつながりができるかということ、改めて考えたいと思います。今日は本当にありがとうございました。

藤藪庸一

いろいろな方が発言してくださって、また本当にいろいろな意見が出てきたことが良かったなと思っています。同時にこの問題に関わり始めている方も何人もおられるということがわかって、僕自身も励まされますし、こういう輪が広がっていけばいいなと感じました。

それから、関わり始めた人が今、感じていることというのは、次にまた、話すことができるんじゃないかと思います。私は自殺を社会問題と位置づけて活動しているわけですけども、個人の、個人個人の問題もやはり私たちは解決をしていかない、その人と共にそれを乗り越えていかないといけないという問題もありますので、また次回こういう会を持つときにはそういうことも分かち合えるのではないかなと思って期待をしています。ありがとうございます。

茂幸雄

自殺対策基本法には、自殺というのは個人だけの責任ではなく社会的に構造的に追い詰められ

た死でもある、と書かれています。社会的構造的に追い詰められた死、追い詰められたって何？
そこらの分析を、まず、しなければならぬんじゃないのか。

先ほど篠原さんが言われていた、駆け込み寺にすべきだということで、全国に呼びかけたということは素晴らしい試みです。しかしそのことは、今までどうだったのかという反面がある。昔はみなさんお寺に駆け込んでいたでしょう。それがなぜか誰も行かないようになった。篠原さんが、これはだめだということで、宗教家が一丸となって、私のところへ駆け込んでくださいと言おうと動き出した、これはまさしく非常に大きな活動です。こうした動きが出始めている。クリスマスもそうです。こないだ天台宗の総本山にも行きました。永平寺も行きましたし、それから浄土真宗の本願寺も行ってお話をしました。いま宗教団体のみなさんが本来の宗教とはなにかということで取り組みを開始しています。そういうことで、本来の姿に戻ってくれる。それを私は非常に期待しているところです。

福山なおみ

今年は法の整備がなされて3年になるのですが、まだまだ自殺者数が多い。それで、改めて暮らしの場から見つめてみようという、こういった視点をあげられたと思います。そして、今日は、私が知らないことをたくさん教えていただきました。まさに暮らしの場で感じたり、体験したりしている人たちから学ぶことから出発ではないかということも教えていただいたように思います。それからネットワークの方向性もこういったところから出発していけたらいいなと思います。ありがとうございました。

佐藤修

ありがとうございました。まだまだ話したりない人も多いと思いますが、時間が来てしまいました。茂さん、またやらないとだめですね。

藤野さんが先ほど民間の方の集まりとおっしゃいましたが、最初に申し込んできたのが市会議員の藤野さんなんですよ。それから行政の方も遠くからの方も含めてたくさん来ていただきました。企業の方もいます、いろんなお立場の方が、今日は参加してくださっていますので、発言していただきたかった方もたくさんいたんですが、時間がなくて残念でした。

今回の集まりを出発点にして、今日ここに集まってくださった様々な人たち、報道関係の方も、取材されている方も含めて、ともかくみんなが立場を超えて個人として参加する、そういうやわらかなネットワークをこれから育てていきたいと思っています。みなさんも今日の集まりを一過性のイベントと思わずに、ここからいろんなことが始まる出発点なんだと考えていただきたいと思います。

それでは後半の話し合いのセッションはこれで終わりたいと思います。どうもありがとうございました。(会場拍手)

これからの取り組みとネットワーク構想について（事務局長福山なおみ）

「自殺のない社会づくりネットワーク・ささえあい」の構想とこれからの活動についてみなさんとともにシェアしていきたいと思います。

<ネットワークの背景>

自殺者3万人超が12年目を迎える状況のなか、法の整備はされましたけれども一向に減らないこの実態のなかで、やはり私たちは暮らしの場に様々なこういった問題が潜んでいることを感じているわけです。そしてそのことを実現するためには、やはり先ほど来ていますが、やはり人と人がつながったり支えあったりということがとても大切になっているのではないかとこのことを考えました。それで支え合える社会を目指そうとこのことを考えました。

自殺防止活動の現状を見ますと、ゲートキーパーと呼ばれている三段壁、東尋坊などの水際活動がある。そこに自殺を考える人が訪れるわけですね。そしてそこに今度シェルターがあります。先ほどの藤田さん佐藤洋司さんといった方たちがこうしたところで支えてくれているわけなんですね。それらは深くつながっている。しかし実際にはゲートキーパー、フォワードのつながりは非常に強いものがあるのですが、フォワード、シェルターとのつながり、ゲートキーパーとシェルターとのつながりというのはまだまだ十分とは言えません。そのことをどのように考えていくのか。今回のみなさんとの語り合いのなかで、そうしたことも確認できたように思います。

<ネットワークのミッション>

自殺のない社会づくりネットワーク・ささえあいでは、このゲートキーパーとシェルターとフォワードが、一緒になって、これまで体験してきた知恵と経験を交流させながら、新しい環境づくりをしていこうということを考えております。この知恵と経験といいますと、あたかもゲートキーパーとかシェルターとかと考えがちかもしれませんが、先ほどもお話ししたように自殺を考えてきた人たちから学ぶこともものすごくあるわけですね。こういったことが辛かったんだ、ではどのような対策、支援をしたらいいのかなどか。ですからこの3つは、決して別々のことではなく、知恵と経験を交流させながら進めていかなければ、この支え合いのネットワークにはならないと私たちは考えています。

その基本というのはやはり人とのつながり。しかも、つながっただけでは駄目で、お互いにやっぱり支え合い、そしてさらに言えばそこから行動を起こしていく、このことがとっても重要になってくると思います。

そして改めてミッションとして申し上げたいことは、人のつながりを広げる、そして支え合いの関係を育んでいくこと、そしてそれぞれが出来ることをやっていくこと、それが自殺のない社会をつくっていくことではないかというふうに思います。

<ネットワークのかたち>

「ネットワーク・ささえあい」の具体的な展開はどのようにしていこうかということを見ると、人のつながり、支え合いの広がり、そこには民間とか企業とか町内会、自治会とか、家庭、個人、NPO、駅とか乗り物、病院、医療関係、行政、ボランティアグループ、ここに書いていないこともたくさんありますけれども、こうしたさまざまな人たちが関わり合いながら、しかも、きちんと組織だったものではなく、ピンと糸の張ったような状況ではなく、やわらかくてしなやかに、どのような状況があっても対応できるような、そういうようなネットワークでありたい

など私たちは考えております。

<ネットワークの活動>

今後の活動予定ですけれども、まず現場視察と関係者の交流です。先ほどの秋田の例もそうですけれども、私たちが調査にうかがったところ以外にまだまだ、教えていただきたいところがたくさんあります。そしてその中から、発見し解決していかなくてはいけないこともたくさんあるだろうと思います。そして、現場視察と関係者との交流を通して、さらにこのネットワークを広げたいと思います。

体験者のつどいも、今年度もあと2回、東尋坊と三段壁のほうで開催することを計画しています。今後は、これも全国的に広げていけたらいいなと思います。そして、各地にぼっぼっぼと灯がともるように、そんなあたたかいつながり、支え合いの場が出来たらいいなと思います。

そして、シェルターネットワークづくり。篠原さんから先ほどもお話がありましたけれども、寺院と教会、そして企業などのシェルター的なものを、全国的にネットワークしていくことも予定しております。シェルターネットワークづくりに関しては、来年の大きな課題です。

それからネットワーク構想の情報発信と仲間づくり。これは今回参加してくださった方々も含めてですけれども、さらに情報発信しながら、仲間がぼつんぼつんの存在から日本全国に広がり、こういう考え方が世界にも発信していけたら素晴らしいんだろうなとも思ったりします。

そして参加者の交流会。先ほど紹介しましたように、なんでも語り合える、本音で語り合える場、顔が見えて安心して語れる場、あそこに行くと元気になって帰ってこれる、そう思えるような、そういう交流会も検討しております。

早速ですが、最初の交流会を11月28日に開催します。みなさんにも是非ご参加いただけたらと思います。

それぞれが出来ることに取り組み、やわらかにつながりながら、誰もが気持ちよく暮らせる社会を一緒に育てていきませんか。これが私たちの自殺のない社会づくりネットワーク・ささえあいの構想です。ありがとうございました。

クロージングメッセージ（ネットワーク設立準備会代表茂幸雄）

長時間にわたりみなさんお疲れ様でした。

マスコミの方も今日は大勢お集まりいただきましたが、そのおかげで、みなさんの声が全国の人に届くのではないかなということで非常に期待しています。今日のこの活動が非常に良かったなという思いです。

特に私が今思っているのは、今私たちに出来ることは何かということをもう一度考えていただけたらなということです。

みなさんのなかにもご存じの方がいらっしゃると思いますが、最後に「ハチドリのひとつく」という話をご紹介したいと思います。南米のアンデス地方に昔から伝えられてきた話です。

森が燃えていました。

森の生き物たちはわれ先にと逃げて行きました。

でも、クリキンディという名のハチドリだけは行ったり来たり。

くちばしで水のしずくを運んでは火の上に落としていきます。

動物たちがそれを見て、そんなことして一体何になるんだと言って笑います。

クリキンディはこう答えました。

私は私に出来ることをしているだけ。

この本を手にとった時に、私すごいなと思いました。私たちのしていることは、ハチドリのひとつくかもしれないけれど、ひとつくがないとこれは始まらないと思うんですね。ここまで来るまでに私どももいろんな抵抗がありましたけれども、やはり動かなければ駄目。考えているだけでは駄目。

ということでみなさんにもハチドリのひとつくになっていただき、なにかひとつ行動に移していただけたらなあという願いを込めて、最後のメッセージとさせていただきます。

どうもご静聴ありがとうございました。

（文責：実行委員会事務局）

自殺多発場所での 活動者サミット

参加者
募集

自殺のない社会をめざして

2009年10月24日(土)

午後1時～5時

日本財団2階大会議室



自殺多発場所を訪れる自殺企図者は、最後の最後まで「できたらもう一度人生をやり直したい」との想いを抱えています。私たちは、この心の叫びに応える必要があると考えます。

いま、自殺多発場所といわれるところで、自殺防止に取り組んでいる人たちがいます。その人たちの活動で多くの人たちが自殺を思いとどまることができています。しかし、自殺多発場所での水際対策だけでは限界があります。地域社会、さらには社会全体で考えていけないだろうか。そんな思いで、自殺のない社会をめざす集まりを開きます。



今年4月に開催された緊急設立準備会



設立準備会交流会にて

■プログラム(予定)

- 活動報告：これまでの準備会の活動を報告します。
- 問題提起：現場活動から見てきたこと、これから取り組みたいことなどを話しあってもらいます。
- 参加者の自由な語り合い：自治体や行政、自殺防止関連団体からの発言も歓迎です。
- ネットワーク構想の発表：これからの活動についての提案をさせていただきます。

■趣旨

自殺多発現場から見てきていることを踏まえて、自殺対策に関する現場からの提言を行うとともに、問題解決に向けてのネットワーク構想の実現に踏み出します。

■参加者募集：だれでも歓迎ですが、とくに

- ・自殺多発場所で自殺防止活動に取り組んでいる行政や住民グループの人たち
- ・自殺防止活動に関心を持っている人たち
- ・だれもが気持ちよく暮らせる社会を望んでいる人たち

■日時：2009年10月24日(土曜日) 午後1時～5時(開場：12時半)

■会場：日本財団2階大会議室(東京都港区赤坂1-2-2)

■定員：150名

■参加費：500円

■参加申込先：自殺のない社会づくりネットワーク設立準備会のホームページより

<http://www.sasaeai.org>

主催：自殺のない社会づくりネットワーク設立準備会(代表：茂幸雄)

後援：NPO法人心に響く文集・編集局、NPO法人白浜レスキューネットワーク、NPO法人自殺防止ネットワーク風、コミュニティケア活動支援センター

NPO法人全国自死遺族総合支援センター、NPO法人自殺対策支援センターライフリンク、一般社団法人日本いのちの電話連盟、内閣府

協賛：ゴールドマン・サックス証券株式会社